京城日報
(年中無休刊)
大正九年一月五日 月曜日 第四千四百二號

獨議定書調印期

公報に曰く獨逸は一月七日講和條約議定書に調印すべく講和條約は八日より効力を發生すべし(東京特電)

講和會議移轉説

[illegible]講和會議[illegible]移轉すべしと報ぜり(巴里電報)

勞働紛擾防止案

米國産業會議會長は勞働紛擾防止の目的を以て一案を起草し聯邦の上最後の解決を爲すべく國務省の批准を仰がんが爲め同草案を發表したり同草案には米國産業裁判所の設定に至る迄勞働紛擾を審査し且つ調節すべき地方委員會の設定を規定しあり又同案は勞働者が最後の手段を行ふべき權利あることを除外し居らず(紐育電報)

パ將軍選擧運動

共和黨全國大會にてパーシング將軍を次期大統領に選擧する運動始まれり(紐育電報)

我學生入學拒絶

日本留學生に對し將來問題の起るべきを豫想して各大學にては其の入學を拒絶したり(伯林電報)

セミヨノフ榮進と誤解

セミヨノフ將軍今回の大榮進は專ら日本の企圖に出たるものと見做されイルクツクの排日新聞紙は盛んに日本を中傷しつゝあり在浦鹽我軍司令部にては是れが誤解を辯明するの必要を認めセミヨノフの總司令官任命はコルチャツク自身の決意に出たるものにして日本は何等該任命に關せざる旨を表したり(浦鹽電報)

コ政府チタ移轉

コルチャツク政府はチタに移轉するの止むなきに至れり若し日軍後貝加爾州を撤退せば極東三州は擧げて過激派の手に歸すべく今や反過激派の運命は懸かりて日本軍の態度如何にあり(哈爾賓電報)

コ軍救援要求

イルクツク軍管司令官はチタのセミヨノフ將軍に救援を求めたり加藤日本大使以下の館員及び特務機關は停車場にあり機關銃を有する日本軍はイルクツクに止まれり(哈爾賓電報)

救援軍隊派遣

セミヨノフ將軍はコルチャツク政府の危急を救ふ爲め裝甲列車にて一個聯隊をイルクツクに急派せり我軍も大使館員在留民保護の爲め小部隊を該所に急派せり(哈爾賓電報)

日本增兵決定

國務省の發表に曰く最近の露國問題に就き國務卿ランシング氏と日本大使幣原氏との間に行はれたる交渉に依れば日本は過激派の東漸に對抗する爲め西伯利に增兵するに決定したり米國は目下西伯利に在る米兵九千人に對し增兵を送らずと(華盛頓電報)

イ市鎭靜に歸す

二十七日午後十時に至りてイルクツク市は鎭靜に歸し叛軍の手に拘禁中の將校四十名は歸還せしめられたり二十八日政府軍は叛軍を追擊してウエルホーレンスクに向ひつゝあり停車場は尚ほ叛軍の手に在る如き模樣なり(哈爾賓電報)

張復辟計畫説

張作霖氏は二月二十日即ち舊暦元旦を期し醇親王を擁立して復辟を計らんとし北京附近軍隊の買收費に數十萬元を支出したりとの風説專ら行はれ居れり(北京電報)

福州派遣艦撤退

福州派遣の軍艦は撤退に決せり(東京特電)

督軍大更迭乎

靳總理は各省督軍省長の大更迭を行ふべく先づ山東督軍を更迭せしむべしと(北京電報)

伊米資本家活躍

最近七箇月間に伊太利米國の資本家は支那に於ける四箇所の鐵道投資權を獲得して借款を契約し四百餘方里に亘る某地の鑛産物採掘權をも掌握せり(北京電報)

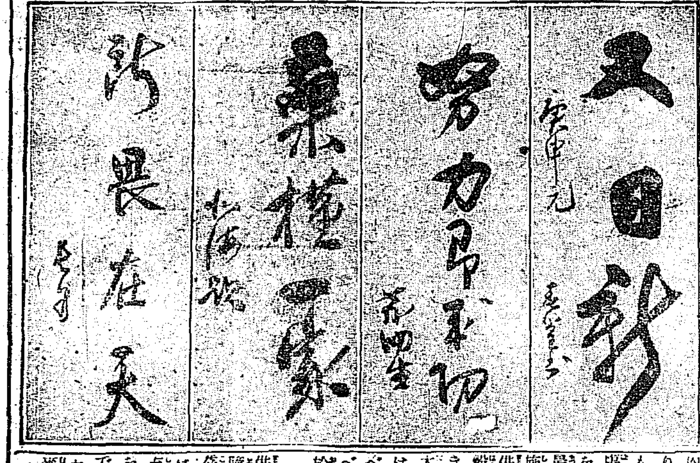
日米協定成立乎

西伯利增兵問題

米國は一兵も增派せず

外國電報の報ずる所によれば西伯利出兵に關する米國國務省[illegible]交渉は我幣原大使と米國國務卿ランシング氏兩氏の間に協定する所あり米國は日本の增兵を承認し米國は今後一兵をも西伯利に增派せずと云へば西伯利の治安維持は日本の手にて極力是れを負擔すべし。外務當局にては是れに對して未だ確報なく一切の揣摩臆測ならんと否認し居れど外國電報が右の如く報じ居る以上恐らく事實なるべし而して昨年末外交調査會の開かれたる際、田中陸相は西伯利增兵に就き極力是れを主張したるに對し外交調査會側にては帝國の重大問題なるを以て愼重審議すべき必要ありとし保留を聲明したるに對し陸相は是を默認し增兵の主張に關しては米國と協定を開始せらるゝに至りたるものにて當時召集中の第十三師團に對しては召集解除令を出さず是を保留して今日に至りたるもの、如く右協定にして果して事實なりとすれば第十三師團兵員は遅滯なく西伯利に送らるゝこととなるべし。西伯利の形勢を見るにイルクツク亦過激派軍により占領せられオムスク政府も退却しつゝあり軍はチタに向つて退却しつゝあり然れどもチタ、イルクツク間には貝加爾の天險あり然れば過激派軍は此の天險を突破してチタに侵入することは不可能なるべし。而も恐るべきは極東三州に於ける軍隊の叛亂にあり露國軍隊にして叛亂を起し過激派に應ずるものあらば極東三州は立所に過激派軍によりて占領せらるゝこと[illegible]あらば極東三州の鐵道沿線に駐屯せる我軍は實に一大危險に遭遇するに至らやも知れず(東京電報)

名士の新年寄書



(右より)美濃部俊吉氏、嘉納徳三郎氏、三島太郎氏、久保要蔵氏

井上中將逝去

前交通旅團長陸軍中將井上仁郎氏は去月二十六日以來流行感冒に罹り臥床中なりしが肺炎を併發し一日午前四時遂に逝去せり享年五十七歳氏は愛媛縣の人にして大正四年一月陸軍中將に進み下關要塞司令官となり除役に編入後は民間飛行界に犧牲的努力を爲しつゝありし人なり(東京支局)

伊集院大使

伊集院大使は二十八日羅馬出發歸朝の途に就きたり(東京特電)

國民糧食の充實(一)

農商務大臣 山本達雄

糧食の充實は國民糧食問題の根本である

糧食問題は近時最も重大なる問題として論議せられ而して新聞雜誌上に於ける論旨を通覽するに新聞雜誌の多くは價格の點に關し其の數量の點を論ずるもの殆ど云はなく正鵠を失するものと云はなくてはならぬ。固より國民糧食の問題たるや一面に於ては其の價格如何も重大なる問題なるが其の供給力果して國民の必需數量を充たすに足りて居るや否やは一段重要なる事項である價格と數量とは今更茲に贅言する迄もなく相互に否定的の相關々係に立つものなるを以て前者を制限すれば後者は其生産を減少し忽ちにして供給困難に陷るは火を睹るより明かである殊に食糧の如き國民必需品は

殆ど此の原則

に依つて支配さるゝのである從つて國內に多量の貯藏品なく又海外よりの供給困難にして將來に於ても供給の餘剩を期待し能はざる場合に於ては先づ充分なる數量を供給し得るの道を確立するは最も根本的にして第一段に於て施行すべき政策である而して其の供給充分なるに於ては價格は一般の水平線までは自然下降すべきは理の當然である、勿論國民大多數の生活狀態如何によりては水平線以下に更に下落せしむべきを必要とする場合もあり得べきである併し乍ら此の場合に於ては

第一段の方策

に依り供給數量を減退せしめざるの保障を條件とせてはならぬ現に今茲の時局に際し歐米各國に於ては以上の原則に基き先づ數量の充實に就て根本的の方策を執るを條件として價格の制限に及んで居る即ち英國の如きは千九百十七年穀物生産法を制定して小麥及び燕麥の最低價格を公定し一般市價が公定最低價格より下落せん場合に於ては其の一般市價と最低價格との差額を政府に於て補償し一般市價は下落するとも農民の敗殘は之を減少せしめざること、し以て生産の增加を確保してゐる又米國の如きも高價格を制定すると同時に最低價格補償の制度を採用してゐる其他獨逸等に於て最低價格制定後物資の生産及び供給に如何に苦心せるかは實に想像以上である此の如きは皆遺憾の消息を語るものと言はなくてはならぬ(東京支局)

總督府御用始式

四日午前十一時より總督府第二會議室に於て御用始式を擧行し總督府各部局長及所屬官署長に對し一場の訓示あり直ちに式を終り又同十一時半より各局部に於て夫々職員に對し局部長の挨拶ありたり

陸軍御用始

四日は司令部師團司令部を始め陸軍各部隊の御用始めなりしも日曜の爲め御用始めの式を行はず要務ある者のみ登廳事務を處理したるに止まり五日は新年宴會にて休暇し六日より一般執務すべし

總督東上期

昨年官制改正の結果として臺灣總督と均しく朝鮮總督も今期議會に於て政府委員を仰付られしが朝鮮總督としては朝鮮統治の上よりも總督が議會に出席する必要少きのみならず總督が長く京城を離るゝに於ては[illegible]常に東上するは不可能なれば總督は本議會開會中機を見て一度出席する位に過ぎざるべく東上も多分二月中旬後なるべしと聞く

師團長症狀

流行性感冒に罹り臥床中の淨法寺第二十師團長は其後の症狀は體溫三十八度[illegible]にて脈搏も異狀無く此の儘なれば或は意外に早く離床を見るに至るべしと

京城穀物初商內

正米は定期の大納會後殆ど持合ひ狀態を以て越年せしが定期納會の氣勢と大盤が春高人氣の擡頭とを作り折柄にて新春內氣配は一般に騰勢なり四日の當市場初取引は屠蘇氣分を加へて案外の活氣を呈し天安玄米は一月渡し標準の四十八圓八十錢にて一車宛四回の初手合ありたる外仁川石拔き一等白米一月中仁川渡し五十五圓九十錢二年米越石拔き一等白米一月十五日渡し五十五圓四十錢にて一車出來せり仁川天安玄米の如きは本年に比し殆んど一圓近くの高値に當れるが元より御祝儀商內の事とて之を以て一般を牽律する能はざるも春高觀念の如何に強きかは此一商內の裏面に以て略ぼ知るに足るべく何分新春々々氣合ひを脱せざるも依然持ち藉みの賣惜み態度を持續さる、限り市場の在米ガスレと相俟つて此際一段の上値に走るや測り難し滿洲粟は二月受渡し關係より双方氣乘り薄の裡に越年し今初會も殆ど纏りなく二十餘車の祝儀商內行はれたり

下關初立會

四日午前六時半初立會をなし次いで仲買人表彰を行ひ十一時林理事長の挨拶ありたり當日出來値左の如し

	寄付	止め
當限	五一、一〇	五〇、六〇
中限	五〇、六九	五〇、三〇
先限	五〇、六九	五〇、四九

長防育二等 五七、二〇
釜山白 五七、五〇
新値中國 五〇、七九 先限 五〇、五五

志岐中將動靜

西伯利派遣軍兵站監より此程第十六師團長に榮轉したる志岐中將は西伯利より歸還後京都留守師團の狀況を視察し赴任の途三日朝京城に入りたるも總督とは姻戚の關係あるを以て終日總督官邸に在りて總督夫妻と歡談し四日朝十時發列車にて任地に向へり

現株內氣配

休日續きの京城現株市場は各店共商內更に行はれず且內地定期の休會にて氣配も定まらざるも三日大阪取引所は休會との入電ありて人氣も變らぬ中にも幾分強含みならんといふ

朝鮮窯業配當

朝鮮窯業株式會社にては十一月末定期株主總會に[illegible]決算を議決したるが本期の純利益金は一萬二千四百餘圓にして一株に對し一割二分三厘弱の配當を爲せり

愛婦新年會

愛國婦人會朝鮮本部役員會員有志は例年の通り來る七日正午京城ホテルに於て新年名刺交換會を開催し新春の賀を交換する由

人事消息

▲柳谷技師氏(朝鮮總督府[illegible])教育資料蒐集の爲め三日[illegible]
▲横山勇氏 今回全州守備隊長より[illegible]
▲志岐守治氏(第十六師團長) 四日朝奉天に向け出發
▲鍋島[illegible]氏(朝鮮雜誌社長) 三日朝出發東上

其の日その日

◇大正八年は帝國の歷史に關し大切なる一新時期を開始した。上は政府、下は一般國民の之れに對する態度如何によりて、帝國の隆替民族の消長にも關すべし。帝國は依然として從前の國是に據りて邁進すべきか將た新なる國是を案出せざるべからざるか、是れ實に大正九年の劈頭に於て、國民の一大考慮を要すべき、最も重大なる問題たるを疑はざる也。

◇試みに年頭に立つて歐州の形勢を觀察せよ。獨逸は新國家として、又もや露を探撲せるものゝ如し。露は攻擊的精神、軍國主義の象徵にして、獨逸が帝國主義の復活し來りたるは、之れ何等の矛盾ぞや。殊に共和國たる獨逸が、依然として獨逸帝國と冠し大統領を帝國大統領と稱しつゝあるに至つては、寧ろ人を喰ふの極と謂ふべし。

◇英國多年の問題たる愛蘭は、世人の豫想したるよりも更に險惡なる難關に逢着せんとするもの、如く、ヂョーヂ首相の提出したる同案が、下院通過さへ既に疑問となれるもの、如し。シン、フェン黨及び勞働黨は、正に猛烈に反對し、自治の不徹底を攻擊し、國民中又之に與するもの多く、統一兩黨の硬派は、政府の急進的態度を嘲笑邀擊しつゝあり。同案果して今後の運命や奈何。

◇佛首相クレマンソー翁、七萬五千の多票を以て、次期大統領に當選すべしと、何ぞ夫れ盛んなる。吾人は翁の演説に依つて佛國の對露政策の一班を窺知するを得たると共に、大いに翁の意見に賛せざるを得ざる也。彼は絶叫して曰く、過激派は常に地上に存したる最惡の政府也吾人は露國の周圍に嚴密なる鐵條網を張りて、國交を埒外に留めざるべからずと。佛國既に然かり、圓滿なる協定を得たる皆の英國亦、まさか勞働黨の尻馬に乘りて、佛國を欺く譯にも行かざるべし。日本亦對露根本策を確定しても、最早や早や過ぎるが如き心配はなかるべく、但必ずしも人後に落ちるの要なきは勿論也。

本號 八頁

謹賀新年

醇良 清酒

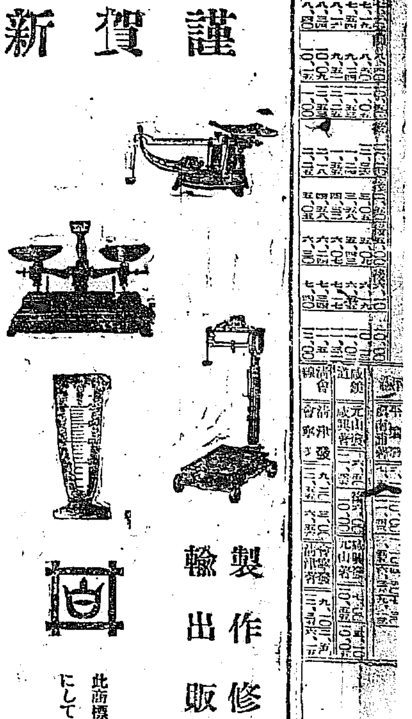
釀造元 大阪府堺市 柴谷合名會社
特約店 京城府岡崎町 島屋總本店 電話九〇三番
特約店 平壤大和町 江口支店 電話 番

英學生之友
受驗と豫習號

中學生と受驗生のために(學習院教授 金澤久先生・明大講師 佐川春水先生・成蹊教授 長谷川康先生)
成績發表と講評(成蹊教授 長谷川康先生・編輯主任 澁谷新平先生)
洋猿と和猿・申歲生れと、猿の… 普及部講師 青木[illegible]先生
英學生に 男爵 神田乃武先生
英學生の覺悟 磯邊彌一郎先生
つむじまがり 伊藤豐守先生
活用英語・英作文の栞・黒馬物語・東京の電車・單語記憶の仕方・一月の日記・英語の學び方・ボウ寺鐘發
和文英譯組・立方・誤譯と正解・致岐其折々・小學讀本の・譯・偉人物語・英文法講話・英文和譯の・骨髓・發音の話
本號に限り參拾錢 送料金一錢五厘
發賣元 東京神田 株式會社 三省堂

謹賀新年

製作修覆 輸出販賣



此商標最も堅牢にして最も正確

合名會社 白井度量衡器製作所
大阪市北區南同心町二丁目
電話長東二七四番 振替大阪六六〇八番

英語普及會編輯
すぐ役に立つ 通俗平易な
中學三四五年の模範英語雜誌
會長 男爵 神田 副會長 子爵 福岡
評議員 帝國大學、陸軍大學、高師學校、高等商業學校、高等工業學校、外國語學校、商船學校、海軍經理學校、慶大、早大、明大、成蹊實業專門學校の諸教授十五名
=新年特別大附錄=
先づ英語を學べ 男爵 後藤新平氏
國際上に於ける外國語の價値 男爵 牧野伸顯氏
受驗と豫習 一中校長 川田正澂先生・三中教諭 木下芳雄先生
模擬試驗成績發表と講評 明大講師 佐川春水先生・成蹊教授 長谷川康先生・編輯主任 澁谷新平先生

荒海社技師瀬長藏儀昨暮以來入院加療中ノ處藥石効ナク三日死去致候間此段謹告仕候
追テ葬儀ハ來ル七日午後一時自宅出棺[illegible]寺ニ於テ佛式相營ミ申候
一月四日
嗣子 一八
兄 荒瀨吉兵衛
親族總代 田中三次郎
友人總代 三井榮長 池田泰治郎 龜井直三郎 末永恭介
荒海社長 松山常次郎
外社員一同

二男晋儀病氣ノ處藥石効無ク二日午後九時死去致候付四日午後一時南山本願寺ニ於テ葬儀擧行致候間此段辱知諸賢ニ謹告仕候 併而葬送ノ際御會葬被下候諸賢ニ御厚禮申上候
父 松田市太郎
兄 松田愼造
親族總代 山下長太郎 平岡今治郎
友人總代 久保田金五郎 久保田長兵衛 安東貞一郎 小川勝平
店員總代 松浦捨市

紫雲棚曳く 大内山の新年
聖上畏くも正殿に出御
内外臣僚二千餘名の參賀を受けさせらる

大内山に朝日照り映ゆる元日の宮城は絢爛たる大禮服の裝ひせる參賀の文武官二重橋畔を行き交ひ御代の彌榮に榮ゆるさま見わて畏し。此日　兩陛下には午前七時半晴の御膳の後八時三十分鳳凰間に出御皇太子殿下を始め各皇族殿下の參賀を受けさせられ續いて正殿にて東郷大勳位外二千餘名の臣僚の拜賀を受けさせられたり(東京特電)

目出たしとも目出たし 東宮御廿の春
御身長實に五尺二寸四分
御體量十五貫に渡せらる

皇室の御繁榮殿勝る中にも、別けて東宮殿下には大正九年を以て御齢へ年二十の春を迎へさせ給ふ。殿下 御平常 の御事を承はるに御學問所に在はす日の御課程は固より、常時御學問御精勵の御志し深く、何れの課程とも旨は下々も及ばぬ程に、おしなべての御努力を傾け給ひ、中にも歴史倫理の御造詣は專門者の域に達せられた、御孝心深く御弟君に對し給ふ御心も厚く、下々を惠み給ふは七千萬民の能く拜する所であるが、御二十を迎へさせられる殿下は、新年の御式滯らせられず、御世襲にて參内遊ばされ御退出後霞殿に御弟宮殿下、各皇族方の御祝詞を受けさせられ陪宴始めの事あつて後は 兩陛下の成らせられる地へ御避寒ある筈で、御體量十五貫、五尺二寸四分餘の御身長を有せられる、強健の御身を倍く練磨遊ばされ御運動の爲めの御乘馬は、殊に試練を積ませられ昨年中も市民の通行渺き地を選び、二回郊外目黒の邊へ乘馬の御催しの事があつた。(東京)

宮中の元始祭
莊嚴を極む

三日は元始祭當日に就き宮中賢所皇靈殿神殿にては午前九時大御前の裝飾を奉仕し主任式部官並床九條掌典長以下各掌典出仕各皇族を始め奉り其の他各員參列の上九條掌典長神前に進み御玉串を奉り拜禮を爲し續いて各員の拜禮あり午後二時終了相成りたり(東京電報)

細川侯祖母 頗る重態

細川護立侯祖母堂ヒロ子刀自は病氣頗る重態なり(東京特電)

待たれる新番附
目立つた變動なし
朝汐は引退 西方愈淋し

大相撲國技館は來る十日目出度開館式を行ふべく、そして十一日太鼓を廻し十二日を初日に花々しく春場所の蓋を開ける段取りまで漕ぎ付けた、其の番附發表は例年の如くであるが、東方では大體目に立つやうな變動もなく、ナゝ病氣の九州山が更に中軸所へ落ちて拔群の源氏山が代つて小結の榮位を得るか、病氣の福柳の後を襲ひ筆頭に落付くか位である、さらに顯勢挽回の技を示した宮城山が三四枚目に躍進するのこ、病氣で再び起つ能はずとまで氣遣はれた鋤洋が幕尻を辷るは止むを得まいとして西方に廻された大の高が危く陥落を免れて東方に舞戻るであらう、さて此の場所に 活躍を 期待され當の本人が大に捲土重來を期してゐる力士に快漢常の花がある此當所活躍如何で大關は疑ひない、しかし專ら部屋してゐる福柳は果して何れだけの働きがあるか疑問である、不振の西方で老勇朝潮の引退はたゞ番附面を淋しくすると共に東雲、射水川、阿久津川の新入幕は氣分を一新するだけで西方の 大勢に 大した影響はあるまい、鬼面毛、敗島の陥落は當然である、關脇の榮位を逸した藤の川は名譽恢復のため元氣横溢してゐるが六七枚は下がるであらう、好成績を舉げた目覺い力士がないため三杉磯は關脇に躍進し大物喰ひの大戸平が小結に坐り、西龍切つての戰功者白岩は一躍筆頭に上るであらう

李子爵葬儀
四日正午水原にて
儀仗兵參列

故從四位勳一等子爵李根澤氏の葬儀は四日正午水原に於て盛大に舉行されたるが陸軍側よりは儀仗兵一中隊を儀仗せしめ齋藤總督宇都宮軍司令官淨法寺師團長其他より寄贈の花輪供花多く同地稀に見る盛儀なりき

けさの消防出初式 (上左)梯子乘り (上右)假裝した假設人物、題して『幸福な猿』と云ふ (下右)假設人物救助演習 (下左)消火演習

遭難守備隊 無事
十一日午後全州に歸還

濟州島守備一小隊が去る二十九日全北全州守備中隊に歸還の爲め木浦港に向け航海の途中大吹雪に遭遇し行方不明となれる爲光州大隊全州中隊では萬一途中船舶轉覆し全滅せるにあらずやと大騒ぎしたるも右小隊は途中大吹雪と戰ひ苦航しつゝ無名島嶼に避難し辛うじて卅日午後四時人員に何等異狀無く木浦港に上陸大苦航なりしにも拘らず步武堂々卅一日午後二時無事全州中隊に歸還したり其旺盛なる元氣をみて愁眉を開きたるも一時は生死不明の爲非常なる騒を演じたり(全州特電)

片岡大將薨去
舊臘卅一日夜八時卅分
腎臟病に尿毒症を併發

從三位勳一等功一級男爵海軍大將片岡七郎氏は過般來腎臟病より尿毒症を併發千駄ヶ谷隱田の自邸に於て靜養中の處頃日急變の模樣あり卅一日夜に至つて危篤に陥り終に午後八時卅分逝去せり享年六十八歳(東京特電)(延着)

大將の略歷

大將は鹿兒島藩士片岡藤太氏の二男で明治十年海軍兵學校を卒へて少尉に任ぜられたが兵學校では伊集院元帥山本、日高兩大將と同時で同校第一期の一番古い卒業生である其後は各艦乘組の外本省及海軍軍令部の要職、艦政本部長、海軍將官會議議員、舞鶴鎭守府司令長官の榮職に歷任し海軍大將に親任せられ日露戰役の際第三艦隊司令長官として偉勳を奏し功一級金鵄勳章を賜はり特に華族に列せられたのは人の知る所である先頃迄軍事參議官の重職にあつたが病氣の爲引退した。

偉勳者
晩年を飾つた海軍問題
日本海戰の

片岡海軍大將は三十一日夜六十八歳を以て腎臟病のため逝去した、海軍部內の 某提督 は愴然として語る 片岡大將の晩年を光輝あらしめたのは彼の海軍收賄問題事件當時であつて、高等軍法會議の判士長として峻烈たる峻嚴さを示した當時海軍部內に於ては非常に大將の周圍に注意を拂つて居たものであつた大將は私的生活にあつては温かい 情深い 方であるが公の立場に立つと情を以て理を枉げるやうなことは決してなかつた薩摩出身であつた丈に山本權兵衛伯に親んだと言はれた嫌があつた、がこれは大將を誤解したものであつた、斯こそ小さかつたが肝つ玉は大きく日露戰爭の際日本海々戰には 貧弱な 一部の艦隊を率ゐて敵の大艦隊を對馬海峽方面に誘き寄せマンマと術中に陥らしめた戰功は忘るべからざるものである、部下誰しも大將に信任したものだつた海軍部内の長老連中の漸次に失くなるのは心細い氣がする云々

釜山の初荷
素晴しい景氣

二日の釜山は未だ夜の明けきらぬうちから初荷で賑つた威勢の好い法被姿に鉢卷勇ましい勇肌な扮裝で各會社商店の出入仲仕は祝酒に頬を櫻色にし社員店員と共に初荷を擁して市中を練り歩くもの幾十組勇ましい木遣の音頭は釜山港の波に響き景氣の好さは推して知られた(釜山支局)

雪中の出初式
大喝采を博した救助演習
銀箭迸る處猛火忽ち消ゆ
新春劈頭の壯觀

穩かな初春は三ヶ日も事無く終つた。四日は前日の四温日和に引かへて寒威骨を刺すばかり一寒七度の午前九時、滿街の積雪は凍て氷原の如き 本社前の 廣場に於て恒例に依る消防出初式は舉行された。式場中央の高塔を圍んで常備消防隊は大漢門前より德壽宮外塀に添ふて展開し、長谷川町側には龍山組、厩舖組、黄金町側には黑田組の各隊が整列して本社前の天幕張りの本部には 主腦部を 網羅し、警務部長其他が續々と姿を見せ課長其他が樂々と提火を圍んで待設ける。午前九時三十分嚠喨たる喇叭の音が響き渡ると指揮官小原警部の『氣を付けッ』の號令一下此日の式が開始された。千葉知事、千葉三部長は小原警部を隨へて自動車に乘 雪を蹴立 て、第一中隊の第一小隊から順次に檢閱を始め、次ぎに水管自動車、破壞自動車、蒸汽喞筒、破壞馬車、水管馬車等の自動馬車隊を初めとして梯子隊、蒸汽喞筒隊、水管車隊等から第二中隊の京城、龍山、厩舖各消防組と逐次巡檢し席に歸した。此時分から群集は式場の周囲に森々と顔を現し 鳴りを鎭 めて十重二十重に人垣を作つて見物する。

演習開始の第二の喇叭が響き渡つた時、漣町二丁目に出火があるとの報知が達したので早速水管自動車は指揮官の命令に依て勇ましく出動したのは時にとつての觀物であつたが、其の報告が終ると第一の 梯子乘は 内地人消防組に依つて演ぜられた際どい離れ業にヤンヤと觀衆の喝采を博した。第二は常備消防隊の火災救助の演習で焰に包まれた三十尺の高塔に機械梯子を繰延べて乘移り炎々と燃上る煙の中から 假設人物 を救ひ出すのであつたが其勇敢なる行動は一同に舌を捲かせる。其の外隊員が救助網を擴げ階上からの飛び降りの救助等の演習があつた、高塔の火が愈々燃上がつて赤い焔の舌が氣味悪く頂を嘗めだした頃を見計らつて常備及び厩舖消防組の一隊は 蒸汽機關 が唸りを立て管の口からは放水勢ひ好く迸しつてさしもの火勢も忽ちに消し止められた演習が終ると『集まれ』の喇叭が鳴つて隊、組員は指定の箇所に集合し、千葉知事、千葉三部長の訓示があり褒賞及び目錄の授與を爲し續いて 壯烈なる 雪中の出初式を終つた。勤續受賞者は二十年勤續の京城消防組小頭原安遠次郎外十年同上消防夫石川久重郎、十年厩舖消防組小頭島崎銀之三郎等で式後各隊、組は總督邸、知事邸の三ヶ所に練込み上敬禮した。

各地の新年

官煙又値上 敷島二十錢朝日十五錢其他夫れ〳〵値上の發表近し(東京特電)

東京 初春の東京は近年になき暖かに平和なる景色にて市中賑ひ居れり(東京特電)

撫順 天朗かに霽れて微風だに無く氣温高くして恰も小春日の如し各戸に國旗を掲げて平和の新年を迎へ撫順神社にては祝賀祭を執行し午前十時より小學校に於いて御眞影拜賀式を行ひ十一時よりは公會堂に於て名刺交換會あり出席者五百餘名陛下の萬歳を三唱し祝杯を舉げ頗る盛會なりき(長春特電)

大連 一日風無く温暖春の如く雪解けて春の如く珍らしく温かなり十時より大和ホテルに於いて新年名刺交換會あり來會者五百餘名、二日も亦温暖にして市內到處賀客にて賑へり(大連特電)

雑錄 面目一新せる本紙新年號を見よ!權威ある創作論文充溢す!

千賀の浦死す

相撲年寄千賀の浦卅日死去す(東京特電)

□龍山宴會一束 龍山有志の催しに係る新年宴會は五日午後五時より龍山にて開催すべく會費は六圓、又龍山消防組は五日午後六時より龍山重なる人々を招待し新年宴會を催す由

灯頭

年賀郵便物は年々増加する一方で配達夫は實に分身術まで要される、チゲ君に荷物を背負はせて配達して居るのは恐らく京城が皮切りだらう、未だ完全に荷物を背負はせる話は頃よく『蹴飛ばされる』喰はされる現在十分前に通話の出來ない話も斷然なのだから淋しく△寒の道路の悪いには弱らせれる、△雪は一種の美觀に相違ないが綿服の文官や盛裝した婦人がスッテンコロリと仲よく投出される樣は殊に見物だ

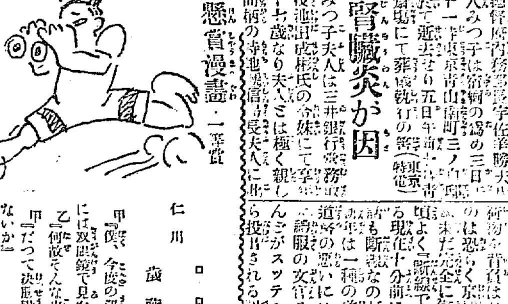
俘虜八百名
送還さる
二日門司より

久留米收容所にありし俘虜七百八十七名は二日ヒマラヤ丸に乘り門司より歸國の途に就けり(門司電報)

宇佐美夫人
三日逝去す
腎臟炎が因

元總督府內務部長官宇佐美勝夫氏夫人みつ子は腎臟炎の爲め三日午前十一時東京青山南町三ノ自邸に於て逝去せり五日午前十時青山齋場にて葬儀執行の筈(東京特電)故みつ子夫人は三井銀行常務取締役池田成彬氏の令妹にて享年四十七歳なり夫人とは極く親しい間柄の

懸賞漫畫・一等賞



仁川　齋藤辰巳

甲『僕、今度の運動會の長距離競走には双眼鏡で見ながら走るのだ』
乙『何故そんな事をするんだ』
甲『だつて決勝點が近く見えるぢやないか』

初火事

四日午前七時府內西大門一丁目[illegible]

漣町二丁目百六十四番地李竹發火し大事に至らず消し止めた

浦客給船上陸

[illegible]

天氣　晴

謹賀新年
釀造用具商
兒玉商店
廣島市天神町 電話七四四番 振替大阪一四四七番
大阪市東區北久太郎町四 兒玉大阪支店 長電話船場四三三番 振替大阪四〇六六八番

旅行中ニ付年賀缺禮仕候
注連内堅石

福神研究號
民族と歷史新年號
三百四十頁 珍圖多數入 定價壹圓 送料三錢
福の神の御系圖は如何?宇賀神、道祖神を始め、御なじみの七福神、吉祥天女、稻荷神、福德神其他各福神の原籍、由來、御神像性格に至る迄喜田博士多年の蘊蓄を傾倒せられたる一大著作にて民族史上社會史上の一新研究として最も趣味に富み神益大なり請ふ一讀を賜え。
東京小石川 日本學術普及會 振替東京一八一六
文學博士喜田貞吉主筆

旅行中に付き年末年始欠禮仕候
阿川重郎

簿記教授 通學通信
男女生徒募集
海記會計學館

廣告
紙幣約五百圓 入紙入
鐵道院乘車證 黑田秀爾名儀
右龍山陸軍官舍ヨリ停車場迄ノ間ニ於テ落失ス拾得屆出ノ方ニハ十分ナル謝禮ヲ呈ス
步七十八聯隊本部 吉村瑞穗

東洋號 製繩機
東洋農機社

謹告
モーター 二十馬力
朝鮮燒酎株式會社

書畫頒布會 支部募集
東洋美術學會

謹賀新年
朝鮮公債株式會社 報國支部 朝鮮支部
西村商會
一月元旦 西村

萬年炭
酒本商店

社員募集廣告
楠田商事部
朝鮮蠶業合資會社

荊妻ミツ儀病氣之處本日午前十一時死去致候間此段通知ニ替へ本紙ヲ以テ謹告仕候
追而葬儀ハ來ル五日午前十一時青山齋場ニ於テ佛式相營申候
大正九年一月三日
東京赤坂區青山南町三丁目三十六番地
宇佐美勝夫

朝鮮總督府判事從五位勳六等遠藤柾治儀病氣ノ處本日午後四時卒去候間此段御通知申上候
大正八年十二月廿七日
妻 遠藤シン
親族總代 伊集院兼好 津守萬吉
友人總代 橋本寛 大橋恒藏 寺川三藏 赤木萬二郎 遠藤諮

禪堂生活（廿二）
人間の改造

問答

大和巡りの時、或る曹洞の寺に投宿を願んだ。小僧の取り次に依りて出て來たのは四十前後の和尚、威儀を正して勵聲一番、『那個の雲衲何れより來る』、劈頭一相見問答の受太刀アワヤ受け損じそして『九秋の皎月空に當つて照し一片の白雲山上より來る』とやつた。和尚は再び『白雲山上何の事かある』と問ふ『一曲兩曲人の會するなし雨過ぎて夜塘秋水深し』とやつた。和尚は又『畢竟如何』と詰め寄る。此に於て衲は臨濟的に喝破してやらうかと思つたが、待て〳〵それよりもと思ひ『通玄は是れ人間の世にあらず　滿目青山　何れの處にか尋ねむ』とやつて見た。和尚は大に感嘆して投宿を許し、其夜は大に御馳走して呉れた。それのみか翌朝は鞋鞵まで包んで門送して呉れた。奈良街に來掛ると一人の偉丈夫に出逢つた。世間話をしながら歩いてゐると禪學の話が出た。此の男は諸方の師家に參禪すること二十年とやらで、

禪の道に

淺識淺からぬらしかつた。親しく伴なはれて其の夜は其の家に投宿したが、藥石（夕食）の後居士は『俺が洪川和尚や越溪和尚に參得してゐた頃は

雲水にも

なか〳〵氣概のある奴があつたが、今時の奴は意口地がない』と氣焰萬丈當るべからず、床の一軸を示し『當節此の意味が解るか』つて大に見くびつてゐる。それは桃和尚の筆になつて『釋迦如來文珠へ岡叫引きつれてそれからそれへ宮城野が原』と云ふのであつた。又袋戸棚から『見渡せば珊瑚をこぎまぜて都ぞ春の錦なりける』といふ香川景樹大人の筆になつた一軸を取り出た。老居士は要するに、衲等をして

定より出

でさらしめんとしたのである。けれども衲は『女子の出定』位は疾くに見てるたので『まだ處堂の頸が足りませんナ！』とやつてみた。處堂の頸とは『野水輕揖を浮かべ、暖煙瀾灘を生ず、晩來湖上より望めば、多くは是れ魚を網するの人』と云ふのである。老居士

手を打つ

て曰く『此奴なか〳〵やりをるわい』衲は此處にても勝利を得、此處でも酒資を貰つて文庫を肩に悠々として春日神社をさして行く、滿目悉く是れ平和、長閑に睡る神鹿も何のその、衲の心は既に淸風明月の境界ぢや。夫から京へ向つて十日目に無事掛錫した

白猿塚
長野末喜

一

昔々、或る田舍町に頓吉と良太と云ふ兄弟がありました。兄の頓吉は至つて慾深く父の遺產は悉く自分一人の物にしてしまひ、弟の良太には纔一合も分けて呉れず、母や弟妹は皆良太に押し付けました。こんな風だから良太の貧乏な事は話しにならず、晝は山に柴を刈り、夜は夜で草鞋を作つて、細々其の日の煙を立てゝ居りました。良太は此のやうに身を粉に碎いて稼ぎますが、それでも貧乏神に追つ掛けられて年から年中、腹の膨れる事はありませんでした。然し心の優しい良太は少しも嫌な顔をせず、母親に孝行を盡し弟妹仲よく暮しました。丁度、秋風が吹いて、木の葉が散る頃、良太は平常のやうに古びた熊手を肩に、山路をトボ〳〵と踏み分け〳〵、落ち柴を掻き集めて居る内に、短い秋の日は早くも暮れ掛つて來ましたから、良太は急いで歸る仕度をして居ました。すると突然、小さな可愛らしい白猿が現れ、良太の手を握り、何か賴んで居るやうに思はれたので、良太は一層可愛らしく思ひ、白猿の頭を撫でてやりました。白猿は尙確く良太の手を握つて連れて歸つて呉れよ、と賴むやうでありましたから、良太は『よし〳〵』と言ひ乍ら、白猿を肩に乘せて歸り、大切に飼つて置きました

二

或日の事、良太は白猿を連れて、山に柴苅に行きました。すると何時の間にか、白猿が見ねぬやうになりましたので、良太は山ぢうを捜して見ましたが、何處へ行つたものか、一向に見付かりませんでした。そこで良太は『あゝ矢張り畜生だなァ』と諦め、柴を擔いで歸らうとしてゐると、白猿がヒヨックリ歸つて來て、紫色に光る二つの玉を良太に渡しました。良太は不思議でなりませんが、紫色に光る玉が珍しいので母親に見せようと思つて持つて歸りました。いつか此の事が殿樣の御耳に入り、其の光る玉を献上せよ、と云ふ御沙汰がありましたので、良太は直樣二つの玉を殿樣に献上しました。殿樣は大層お喜びになり、種々の寶物を賜はりました。今迄貧乏であつた良太はお蔭で忽ち大金持になり、一家樂しく暮して行くやうになりました。之も白猿のお蔭だと云つて、皆白猿を可愛がりました

三

弟が俄に大金持になつた、と聞いた兄の頓吉は羨ましくて〳〵てなりません。或日、良太に向かつて、大金持になつた譯を尋ねました。良太は包み隱さず、白猿が二つの紫色に光る玉を拾つて呉れた、と申しますと、頓吉は『俺にも其白猿を貸せ！！』と無理に之を借り受けて山に行きました。すると白猿は今度は黄金色の玉を二つ拾つて來ましたから、頓吉は非常に喜び、飛ぶやうにして我が家へ歸りました。そして逢ふ人毎に『俺も今に大金持になるぞ』と自慢してゐましたが、白猿には何一つ食はせず、柱に縛り付けて居りました。此事が殿樣のお耳に入つたと見ね、頓吉にも、黄金色に光る玉を献上せよ、と御沙汰がありました。頓吉は心の中でしめたと喜びながら、直樣玉を献上しました。殿樣は之を御覽になつて『ほゝう、立派な玉ぢや、紫色の玉より綺麗ぢや』と非常に御滿足の態でありましたが、何うしたはづみか、其玉が臺の上に落ちたかと思ふと、忽二つに割れて、中から蛇が二三匹飛び出した。之は不思議と、もう一つの玉も打ち碎いて見ると又々蛇が飛び出ましたので、殿樣は殊の外の御立腹。『ソレ頓吉を召し取れ』と家來の者にお言ひ付になつたから、頓吉はビックリして逃げて歸りました。そして家に歸るなり、柱に縛り付てあつた、白猿を憎摑みにして、『此畜生、俺を酷い目に會はした。こうして呉れる』と云ひながら、岩角目がけて投付けましたから堪りません、白猿は可愛さうにグウとも云はず、死んでしまひました

四

良太は頓吉が、いくら經つても大切な白猿を返しませんから、頓吉の所に迎へに行きました。頓吉はお詫をするところか却つて『殿樣まで俺を欺したな、猿が欲しけれや、屍骸でも拾つて行け』と憎まれ口を利きました。良太は泣く〳〵白猿の屍骸を背つて歸り、庭の隅に埋めて懇に吊つてやりました。暫くすると其塚の眞中から淸水が湧いて來ましたが、此水は不思議な力を持つて居て、如何なる難病でも、如何なる惡人でも、忽ち全快し、改心すると云ふので近郷近在から水を貰ひに來てはお錢を置いて行きますから、良太は一層大金持になりました。

五

之を聞いた頓吉は、又も、弟に其譯を尋ねました。良太は正直に有りの儘を話しました。さあ頓吉は今度は其猿塚が欲しくて堪まりません。それを俺に讓せよと無理を云ひますと、不思議や頓吉は俄に大病に罹り、命も危く見ゑましたから、良太は取るものも取りあへず件の清水を汲んで來て兄に飲ませました。すると、今迄の大病人は忽ち忘れたやうに癒つてしまひ、精神までも入れ替はりました、以來、兄の頓吉は良太を羨まず母親には孝行を盡し、弟妹とは仲よく暮すやうになりました。又良太は其後殿樣の御病氣を此清水の力で癒したので、特に位を授けられ一層幸福な身分になりましたこさ。　めでたし〳〵

伊達騒動
小金井芦洲講演

第百五席

賢君の隻眼人を射る

取分けて仙臺家で誠に可笑しく感ずるのは身分の輕い供廻りを致しまする陸尺……陸軍の陸に尺といふ字を書く、所が伊達家は陸ッ守で、陸の字は殿樣へつくと云ふ所から此字を使はない轎尺と書きましたもので、未だ可笑しいのは從前は時が十二時で、九ッ八ッ七ッと來て六ッといふと君公の御名を呼ぶことになりますから六ッをいはないので五ッ四ッと來る一ッ時〳〵に拍子木を打つて知らせますが六ッだけは拍子木を打ちませぬ、六ッ時だけは無時と申しましたもので其他にも色々こんな變つたことがありますから、中田五右衛門鳥渡聞いた時は分からなかつた、段々尋ねると二人ながら却々身分のもので、一人は二千三百石、一人は千八百石宿老を勤めるといふのですから卿人板倉內膳正殿へ此事を申上げると　內『訴訟人両人は然らば伊達陸奥守臣といふことにして取扱をいたせ』恐うい ふ御沙汰ですから至つて丁寧のお扱、暫く立つて二人は公用人の中田五右衛門の案內を受けお槪廊下を進みます、之が伊達安藝の家來だ、又者だと云ふことになれば御庭前でお目通りをしなければならぬ、大層な違ひのものでお差圖に從つて著座をする、中田五右衛門から『エ・恐れながら訴訟人罷り出でましてございます』內『オ・苦しうないこれへ進め』五『ハ・ツ』兩手を突いて頭を垂れて居た二人が徐ろに頭を擡げて見ると九曜巴の紋付いたる片衣に染字の お袴 黑羽二重に同じ紋付いたる御衣服、俗服でお出でなさるけれども、樹處自ら備はり、今賢君の傍の少しく前に進み出まして 內『い板倉內膳正、二人は恐る〳〵伊賀忠四郎、今般訴へ出でたる仙臺一門伊達安藝名代眞田求女訴訟は今日初めて訴へ出でたるものではあるまいの、如何である』伊賀忠四郎恐る〳〵 忠『去ぬる八月中旬江戸表に出府仕り御老中第一老久世大和守樣に願ひ出でましたる所、願書は一應お取上には相成りましたが其後杳として何の御沙汰もなく夫れより順を經て外御老中樣へお訴へ申上けましたが是以て其儘に相成りました、然し御上げなしこて立歸らば奥羽廿四郡六十餘萬石の一大事、今更容易しく歸國も相成り兼ね進退茲に谷りまして恐れ多きことには存じますれど御歸城の途を憚らず斯く願ひ出でましたる次第、臣等の心の裡、篤と御賢察下し置かれまするやう、願ひ上げ奉ります』內『ウム頭行先へ訴へ出づるは能く〳〵の事と存じ斯く御宅へ召し連れ立戻つた他の老中方御取用ゐなきは是りや聊か仔細のあることであらうが予は唯今願書を見た、成る程伊達家の浮沈興廢、即刻にても取調べを開始いたしたけれど、然し本年も最早や年末と申し御用納めも目の前に迫たはり、迚も萬年のことには相成らぬ、予が確と預かり置く、何れ明年御參賀を以て兩人を召出すやうに致す、其方等二人は一先づ歸國致せ、但し願書に參つた伊達安藝に逢ふたらば左樣申せ、訴狀

滯貨と荷拔（鮮滿）

全北輕便鐵道の滯貨及び荷拔問題は全沿線に亘り物議を惹起し輕鐵重役に對し全北道廳よりの交渉する所あり爲に過日輕鐵には重役會を開き其結果下山時彥氏は重役を代表して客月廿日全北公會堂に於て全州有志五六十人と懇談する處ありたるが有志側にては本問題は獨り全州のみにて決定すべき性質のものにあらずとなし群山裡里大場村參會の有志と協議することゝせり尚全北輕鐵に次ぎ群山稅關に於ても滯貨及び拔取り事件の聲一般に高く故に記者は此程群山に出張稅關吏橋本卯太郎氏を訪ひたるに丁度仁川稅關より調査用來せる尾關光助氏も在り兩氏よりの說明を聽くに左の如き理由が一の原因をなし居れり（全州）

一、運搬人夫の不足加ふるに被帶一日の賃金壹圓乃至三圓に達し夜業する者なし

二、貨物の激增が前年に倍加せること

三、通關屋の手不足

寫眞　京城旭町一丁目　河原寫眞館　電話二九八一番

豆粕製造能力
二千五百萬枚

昨年の豆粕は比較的高値を持續せる關係上大連に於ける油房業者も例年夏季閑散時は操業休止せるが昨年は殆ど引縮き操業せるを以て製出量著しく增加せり即ち本年一月及十一月末に於ける大連の豆粕製出總數は二千五百萬枚に達し之を大正五年以降各年數に對比するに大正五年一千八百八十六萬枚、六年は一千三百三十六萬枚、七年二千三百四十一萬枚にして既往十一ヶ月間に於いて既に近年に於いて最も製出數增加し七年度に比し約二百五十萬枚の增加なるが、未だ一ヶ年間に於て最も製造能力の高き十二月一ヶ月を剩せるが前年に比し巨數の生產增加を見るに至るべしと云ふ（大連）

郵便局改築（大連）

大連郵便局は現在の廳舍にては狹隘を告げ事務の進捗に不便あるより愈々大正十年度より向ふ四箇年の繼續事業として經費約百六十萬圓を以て新築する事に決定せりと

寫眞　夜寫　京城旭町一丁目　河原寫眞館　電話二九八一番

安部油房の發展

安東縣安部油房は創立後滿十周年に相當し近年異常の大發展を遂げたるが同油房の歷史は頗る波瀾曲折を經來り當事者の刻苦慘憺漸くにして今日の隆盛を見たるものにして安東縣に於ける邦人經營唯一の油房なり現在の敷地は五千三百六十二坪にして建物は煉瓦造十棟九百十八坪餘木造十二棟五百二坪外に目下建造中のもの煉瓦建二棟二百九十餘坪主要機關は原動機二臺九十馬力機罐二臺、碎豆用ローラー四臺、搾油機水壓式十二臺手絞式百十七臺一日の豆粕製造高は四千二百八十七枚豆油二萬斤一箇年間原料消費高大豆二十萬石一箇年の製造能力豆粕九十萬枚豆油四百二十萬斤其價格五百萬圓にして代表社員は金井佐次氏なり（安東縣）

◎大連取引所不認可（大連）　大連取引所令公布と共に大連石本氏等數十名より關東廳に出願せる錢鈔大連重要物產取引所及び錢鈔取引所の件は不認可となりたるがその理由として傳へらるゝ處は既存の信託會社未だ存立年限內にあるを以てなりと

暦

一月五日　（舊）十一月十五日　月曜日　みづのへいぬ　二黑　先勝　心　ひらく

宮中新年宴會

▽二黑▲能く前後を考ふべき日
▽三碧▲世話の仕甲斐のなき日
▽四綠▲的外づれ勝なる日也
▽五黃▲親密の日にて萬事に吉
▽六白▲進んで利を得べき日也
▽七赤▲名實共に有利なる日也
▽八白▲嬉しき親しみある日也
▽九紫▲祝盃の揚るべき日なり
▽一白▲目出度き日にて萬事吉

一月六日　（舊）十一月十六日　火曜日　みづのとゐ　一白　暗劍北　友引　尾　ひらく　八せん終り

滿月

▼一白▲周圍に氣を配るべき日
▼二黑▲喜びごとあるや知れず
▼三碧▲愉快なる日にて萬事吉
▼四綠▲何となく嬉しき日なり
▼五黃▲あやふやの事多き日也
▼六白▲病氣を殊に注意すべし
▼七赤▲輕擧を愼まば萬事吉也
▼八白▲幸運の日にて萬事に吉
▼九紫▲よろづ早いが勝の日也

演藝案内

大正館　櫻井町　電話八七三　日本活動寫眞會社代理店　一月元旦より新春特別大興行　新派悲劇『女間諜』全四卷　東海道膝栗毛

喜樂館　本町一丁目　電話九七番

壽館　本町二丁目　電話一〇五〇

浪花館　京城明治町　電話二六〇　一月元旦より正午後六時開場　京阪大合同落語　淨瑠璃

黄金館　黄金町　電話二六三七

新皿屋敷　全四卷

ジュアンの行衞

松風村雨　全五卷

水戸黄門漫遊記

?御婚禮衣裳?
嫁子　黑縮緬白無地　
婿殿　黑羽二重紋附
媒人　黑縮緬無地共
袴　（仙台御召）
トンビ
コオト
横綱屋衣服店　電話西三二七　大阪九條通

純金包張保險

純金大流行の最新形

實用懷中時計ロハに成る引換券を進呈す

壹圓五拾錢　均一

貴寶堂荒木商店　大阪市東區上本町九丁目　振替口座大阪五六九三

習字御手本類何でもあります
習字（目錄進呈）
精華堂法帖店　東京神田區南神保町九番地（九段電車通り）

りん病根治の發明
どうしても藥では根治しない

なぜ藥で治らぬか　淋菌が一たび尿道に入れば、忽ち粘膜を侵して皮下に巢窟を作り、一方には粘液の出る無數の小孔のなかに深く侵入して、此の二ヶ所を根據地として盛んに繁殖します、其巢窟と小孔の中には血液も通はねば藥液も屆かぬのですから、何んな強い殺菌藥を服んでも又は注入しても、只尿道面に溜て居る淋菌が死で一時上治りするのみでありますが従來の總ての藥や手術では根治しないのが當然です

それを手輕に根治するには本器の如く特許の本器を使用すれば總て最新の處方に依り、尿道全體に亘つて居る巢窟を破壞吸收し且つ無數の小孔內の淋菌も殲滅し、百法誤療した數十年の痼疾も恐く吸取て總ての根據地を絕滅し再發せぬ眞正治癒の幸福が得られます

●男女淋病根治器　定價金拾圓八十錢　送料十八錢

新療法研究所　東京京橋木材木町三ノ二五　振替東京二九四九番

大阪支部　大阪北區北森町一同　電話○三二

開業廣告

謹啓今般建興公司染料工場の業務一切を繼承し大正九年一月より營業開始仕候間何卒格別の御引立を賜り度右御披露方奉希上候

大正九年一月一日

滿鮮染料工業株式會社

取締役社長	寺尾德母
常務取締役	小川義雄
取締役	加藤鐵治郎
取締役	杉原佐一郎
取締役	高橋貞二
取締役	阿部國造
取締役	山本喜房
監査役	今村治作
監査役	横江重助
監査役	松隈哲次
相談役	鶴井仲治
相談役	多田榮吉
	王建極

一資本金　壹百萬圓

營業課目「シレナーエキス」製造販賣（滿鮮新義州府本町）綿糸シルケット加工染色工業（支那安東縣六道溝）

謹啓今般弊工場業務一切を滿鮮染料工業株式會社へ讓渡候間茲に從來の御高疵拜謝方謹告仕候　敬具

大正九年一月　建興公司染料工場　工場主　寺尾德母

地方

支部長

採用

高尙且つ業務は易にして本を要せず收入二百圓以上可望方は東京芝區切手四枚要規則書送付

草臥井ノ冊七上野寺染

大木五臟圓

…海に愉快なる計畫と存じます。國民營養の增進に就て從來の無自覺の境地を漸く離れ、創めて自覺たる眞に我國人に適する根本的體質强進の方法が研究されるのは眞に喜ぶべき一大黎明期に達したと申さねばなりません。我國の滋養强壯劑で政府登錄の藥效書中に此の深甚なる意味を主張せるものに、

大木五臟圓　ある事を御記憶下さい

（藥效）貧血、腦病、肋膜炎、氣管支炎、喘息、心臟衰弱、神經衰弱、胃腸病、婦人血の道、産前産後、一般虛弱者

價	藥
四日分	五十錢
九日分	壹圓
二十日分	二圓
卅一日分	三圓

本社　東京市神田區鍋町大通り
支社　大阪市東區淡路町一丁目
大木合名會社
振替東京四八〇、大阪七七九五

▼全國藥店にて販賣す、大木五臟圓の文字と人物の商標御注意肝要、九日分壹圓以上御求めの方へは本社發行「眞理健康法」一册無代進呈　求の節請求券貼付を本社宛に送られたし、一日早ければ一日の益あり

國民營養所設置

世界第二の營養試驗所　日本的の研究　內務の新事業

內務省が旣に豫算會議にも廿五万圓と查定された國民營養所設置事業は約千五百坪の敷地で內五百坪の四階建築豫定だが此一部に設ける營養試驗所（經費豫算五万圓）は世界唯一の米國ペネヂクトに在るカーネギー會の同種

◇試驗所に　次ぎ實に世界第二位の設備で便に歐洲科學界を凌ぐものであらう　由來外人は肉食であるから、研究も割合に簡易に結果が分る、例へば便にしても

◇肉食者　は營養が十分に吸收されて吸收の營養量も能く分るが菜食者は含水炭素が皮膚に廻つて發散して了ふので便に依る試驗でも外國の研究法では巧く行かぬので全然

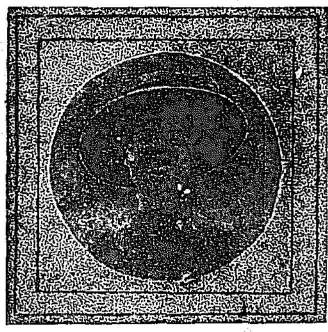
◇日本人的　の新研究が成されるので試驗所も大仕掛である內務省に近い所に建てたいのではあるが場所の都合が悪いので何れ郊外に建つことにならう（立案者內務省氏原技師談）―十一月二十日　東京日日新聞所載）

桃谷研究試驗所創製

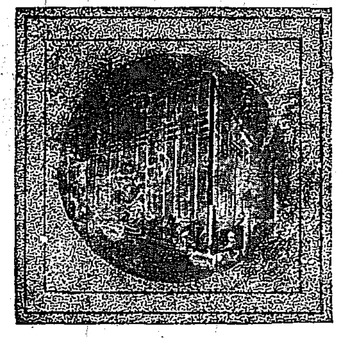
美顔白粉

◆光澤ある美顔化粧料三十六種の內◆

美顔白粉始め美顔化粧料三十六種はマリー・ルウヰズ孃御試驗の上常に尊き御方々の御用にまで推奨せられ學術的完全品として婦人界全體の人氣を收め絕大なる産額を示しつゝあり



常に高貴方御化粧上の御用に召さるゝ美容術大家……マリー・ルウヰズ孃

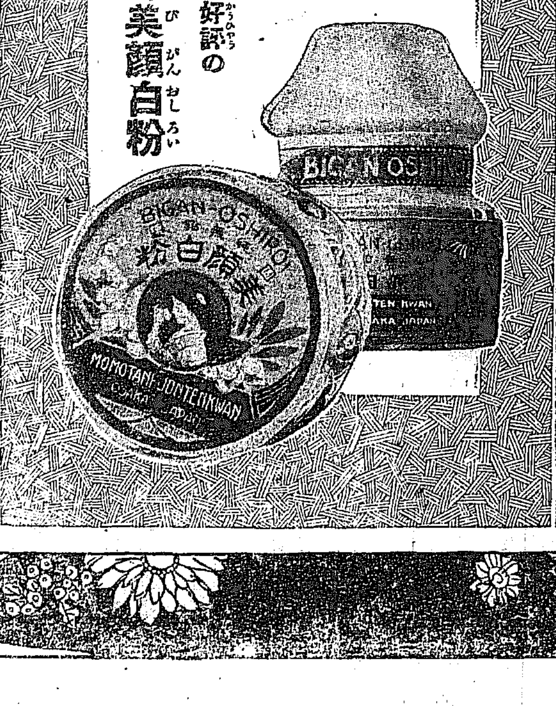


各種の化粧品に就き常に專門的研究を續けつゝある……桃谷研究試驗所

◆美顔化粧料發賣元
桃谷順天館
東京市日本橋區本町四丁目
東京市麴町區有樂町一丁目(実驗所)
大阪市西區靱南通二丁目

▼營業所電話
東京本局 二三〇番
同 一大二六番
同 一六二七番
大阪土佐堀 六四七番
同 六四八番

▼實驗所電話
東京新橋 一六一三番
同 二六三九番
同 三六一四番
振替 (東京一五〇八八番 大阪二九二番)



◇美顔化粧料三十六種を創製したる 桃谷研究試驗所
△所長 藥學士 桃谷幹次郎
△技師 理學士 西澤勇志智
△同 醫學士 藥學士 米倉昌達
△同 藥學士 小磯勝次郎
△同 藥學士 齋藤銑助
△顧問 醫學博士 山本淳二氏
藥學博士 丹波敬三氏

大正三年十九月八日第三種郵便物認可
THE KEIJO NIPPO 大正九年一月五日 (月曜日) 第四千四百二十號 (附録) (一)

京城日報 其七

華かに新年御宴 聖上陛下豊明殿に出御 各皇族及び各大勳位各國務大臣並びに各國使臣其の他を召さる

五日 天皇陛下には正午より豊明殿に出御各皇族及び王世子垠殿下始め山縣松方東郷大隈の各大勳位原内閣總理大臣以下床次山本高橋内田田中加藤野田中橋の各國務大臣並に公爵從一位勳一等侯爵二等宮中顧問官麝香間祗候錦鶏間祗候貴族院議長大岡衆議院議長及び各國使臣を召させて新年の御宴會を開かせらる時刻に至れば 陛下には各皇族宮、王世子垠殿下を始め奉り波多野宮相正親町侍從長内山武官長戸田式部長官以下式部官の扈從にて出御あり此時大勳位各大臣各國使臣等は千種の間に列立して 陛下を迎へ奉り 陛下は御道すがら之れに拜謁を賜ひ諸臣の扈從にて豊明殿に入らせらるれば各員の磬折して敬意を表し奉る間に 陛下には玉座へ著御遊ばさる、斯くて 新年の佳辰に方り各國代表者並に各大臣等と祝宴を開き歡を倶にするは朕の滿足する所なり茲に友邦の君主及び大統領の健康を祝し併せて交際の倍々親密ならん事を望む この意味の勅語を賜へば外臣の首座に在る

英國使臣は 各國使臣を代表して 陛下より賜りたる優渥なる勅語に對し本使は外交官一同を代表して茲に至深なる謝意を表すの光榮を有す恭しく惟みるに本使等の代表する君主及び大統領に於ても亦 陛下の勅語に對して深く滿足せらるべき事を信ず本使等は新年の佳辰に際し恭敬なる祝詞を 陛下に呈すると共に衷心より 陛下皇后陛下及び皇族殿下並に同妃殿下の御健康を祝し奉る尚日本帝國の安寧及び日本國民の幸福並に日本國と其友邦との間に於ける交誼親善の爲め 陛下の治世の隆昌にして悠久ならん事を懇禱す こいふ意味を奉答し次いで原内閣總理大臣は 茲に新年の佳辰に方り群臣を御宴に召し且つ優渥なる勅語を賜ふ臣等感激の至りに堪へず臣等群臣に代り謹で天恩の厚きを謝し恭しく聖壽を祝し奉る

御宴は開始 され先づ

より舞樂始まり次いで獻を 陛下に供御し奉る 御吸物、洲濱臺、御鉢肴、御刺身、御宇蒲煮、御温物、御酢物、御加薬飯、御蒸し物、御水の物、御取肴、御吸物、等を 陛下に供し奉りて後賜餐次に各皇族殿下王世子垠殿下以下に賜ふ、斯くて華やかに御宴會も恙無く終れば 陛下には再び波多野宮相正親町侍從長内山武官長戸田式部長官以下式部官の扈從にて入御遊ばされ各皇族殿下王世子殿下以下及び各國使臣は再び磬折して敬意を表し奉り順次退出す

御内儀御内宴

皇后陛下には同日午後二時三十分より宮中御内儀にて各皇族御息所を招かせられ御内宴を催させらる（東京支局）

日鮮關係古代史に於ける庚申年の出來事 其の一部を紹介す

總督府編輯課長 小田省吾

大正九年庚申一月の初刊號には、何か面白き日鮮關係の史料でもといふ依嘱を受けた。丁度年末のことであつて公務多端の折柄でもあり、且は一両京都の帝國大學及び其の他の地方へ出張を命ぜられた直際といひ、迚も込み入つた事の出來ないのは勿論である。そんな際で今度は一先づ御斷りなして置かうかとも思つたが、熟く考へて見ると、一旦御引受して置いた事でもあり、且又新聞社の方の都合もあるであらうかと思ひ直し、ほんの其の場塞ぎの爲めに國史の中から、其の一部分だけを紹介して置いて、先づ第一に朝鮮の貴紳士方や、學生諸君の御參考に供したいと思つたのである。

左に記した史料だけでは、實際のところ斷片的のものに過ないけれども、此の新正の機會に於て其の一部の人々だけになりとも、今日の場合一應讀んで頂いて置くのは、嚴に相互の幸福である。王師事に、日鮮兩民族の關係事情が、好惡共に一朝一夕の間柄でないことがわかり、且また此の當時に於ける日本民族の祖先等が、朝鮮半島の古代に遡つて、一意專心強きを挫き弱きを助けて、これほどまでに努力を惜しまず、百濟任那の人々等（今の京畿、忠淸南北、全羅南北、慶尚道等の大部分に亘る人士の祖先）の爲に、緣の下の力持ちをして來たなどの事情も知れて、日鮮兩民族間の血族的關係をも了解する人々が出來るに相違ないといふ微志に聊か副はれて、此の一部分だけの顛末を記述することゝした。次の記載は即ちそれの梗略なのである。

そこでまづ第一に御紹介すべきは應神天皇三十一年庚申の年の記事であつて下の通りに記されてある。

卅一年秋八月。詔群卿曰。官船名枯野者。伊豆國所貢之船也。是朽之不堪用。然久爲官用。功不可忘。何其船名勿絶。而得傳後葉焉。群卿便被詔。以令有司。取其船材。爲薪而燒鹽。於是得五百籠鹽。則施之周賜諸國。因令造船。是以諸國一時貢上五百船。悉集於武庫水門。當是時。新羅調使共宿武庫。爰於新羅停忽失火。即引之及于聚船。而多船見焚。由是責新羅人。新羅王聞之。讋然大驚。乃貢能匠者。是猪名部等之始祖也。初枯野船爲鹽薪燒之日。有餘燼。則奇其不燒而獻之。天皇異以令作琴。其音鏗鏘而遠聆。是時天皇歌之曰。[illegible]（日本書紀卷十應神天皇三十一年庚申ノ條）

それから第二に御紹介すべきは欽明天皇元年庚申の歳の記事であつて下の通りに記されてある。

二月。百濟人己知部投化。置倭國添上郡山村。今山村己知部之先也。八月。高麗百濟新羅任那。並遣使獻。並修貢職。召集秦人漢人等諸蕃投化者。安置國郡。編貫戸籍。秦人戸數總七千五十三戸。以大藏掾爲秦伴造。九月乙亥朔己卯。幸難波祝津宮。大伴大連金村。許勢臣稻持。物部大連尾輿等從焉。天皇問諸臣曰。幾許軍卒伐得新羅。物部大連尾輿等奏曰。少許軍卒。不可易征。曩者男大迹天皇六年。百濟遣使。表請任那上哆唎。下哆唎。娑陀。牟婁四縣。大伴大連金村。輙依表請。許賜所求。由是新羅怨曠積年。不可輕爾而伐。於是大伴大連金村。居住吉宅。稱疾不朝。天皇遣靑海夫人勾子。慰問慇懃。大連怖謝曰。臣所疾者。非餘事也。今諸臣等謂臣滅任那。故恐怖不朝耳。乃以鞍馬贈使。厚相資敬。靑海夫人依實顯奏。詔曰。久竭忠誠。莫恤衆口。遂不爲罪。優寵彌深。是年也太歲庚申。（日本書紀卷十九欽明天皇元年庚申ノ條）

それから第三に御紹介すべきは推古天皇八年庚申の歳の記事であつて下の通りに記されてある。

八年春二月。新羅與任那相攻。天皇欲救任那。是歲。命境部臣爲大將軍。以穗積臣爲副將軍。則將萬餘衆。爲任那擊新羅。於是直指新羅。以泛海往之。乃到于新羅。攻五城而拔。於是新羅王惶之。擧白旗到于將軍之麾下而立。割多多羅。素奈羅。弗知鬼。委陀。南迦羅。阿羅々六城以請服。時將軍共議曰。新羅知罪服之。強擊不可。則奏上。爰天皇更遣難波吉師神於新羅。復遣難波吉士木蓮子於任那。並檢校事狀。爰新羅任那王二國遣使貢調。仍奏表之曰。天上有神。地有天皇。除是二神。何亦有畏乎。自今以後。不有相攻。且不乾船柁。毎歲必朝。則遣使以召還將軍。將軍等至自新羅。即新羅亦侵任那。（日本書紀卷二十二推古天皇八年庚申ノ條）

それから第四に御紹介すべきは、齊明天皇六年庚申の歳の記事であつて下の通りに記されてある。

六年春正月壬寅朔。高麗使人乙相賀取文等一百餘人泊于筑紫。夏五月辛丑朔戊申。高麗使人乙相賀取文等到難波館。是月。有司奉勅造一百高座。一百衲袈裟。設仁王般若之會。又皇太子初造漏剋。使民知時。又阿倍引田臣獻夷五十餘。又於石上池邊作須彌山。高如廟塔。以饗肅愼四十七人。又擧國百姓。無故持兵往還於道。秋七月庚子朔乙卯。高麗使人乙相賀取文等罷歸。九月己亥朔癸卯。百濟遣達率沙彌覺從等來奏曰。今年七月。新羅恃力作勢。不親於隣。引搆唐人。傾覆百濟。君臣摠俘。略無噍類。於是西部恩率鬼室福信。赫然發憤。據任射岐山。達率餘自信據中部久麻怒利城。各營一所。誘聚散卒。兵盡前役。故以棓戰。新羅軍破。百濟奪其兵。既而百濟兵翻銳。唐不敢入。福信等遂鳩集同國。共保王城。國人尊曰。佐平福信。佐平自信。唯福信起神武之權。興既亡之國。冬十月。百濟佐平鬼室福信遣佐平貴智等。來獻唐俘一百餘人。今美濃國不破片縣二郡唐人等也。又乞師請救。并乞王子余豐璋曰。唐人率我蟊賊。來蕩搖我疆埸。覆我社稷。俘我君臣。而百濟國遙頼天皇護念。更鳩集以成邦。方今謹願。迎百濟國遣侍天朝王子豐璋。將爲國主。云々。詔曰。乞師請救。聞之古昔。扶危繼絶。著自恒典。百濟國窮來歸我。以本邦喪亂。靡依靡告。枕戈嘗膽。必存拯救。遠來表啓。志有難奪。可分命將軍百道俱前。雲會雷動。倶集沙㖨。翦其鯨鯢。紓彼倒懸。宜有司具爲與之。以禮發遣。云々。十二月丁卯朔庚寅。天皇幸于難波宮。天皇方隨福信所乞之意。思幸筑紫。將遣救軍。而初幸斯。備諸軍器。是歲。欲爲百濟將伐新羅。乃勅駿河國造船。已訖。挽至續麻郊之時。其船夜中無故艫舳相反。衆知終敗。科野國言。蠅群向西。飛踰巨坂。大十圍許。高至蒼天。或知救軍敗績之怪。有童謠曰。[illegible]（日本書紀卷二十六齊明天皇六年庚申ノ條）

それから第五に御紹介すべきは光仁天皇寶龜十一年庚申の歳の記事であつて下の通りに記されてある。

十一年春正月丁卯朔。[illegible]。宴五位已上於内裏。[illegible]明神。己巳。大皇御[illegible]朝。唐使判官高鶴林。新羅使[illegible]受賀。[illegible]金[illegible]蘇芳。各依儀拜賀。辛未。新羅使獻方物。仍奏曰。新羅國王言。夫新羅者。開國以降。仰頼聖朝世々天皇恩化。不乾舟楫。貢奉御調。年紀久矣。然近代以來。境内姧寇。不獲入朝。是以[illegible]貢御調[illegible]智。元正。又訪得遣唐判官海上三狩等[illegible]使。又依常例進學語生。參議左大弁正四位下大伴宿禰伯麻呂宣勅曰。夫新羅國。世連舟楫。供奉國家。其來久矣。而泰廉等還國之後。不修常貢。每事無禮。所以頃年返却彼使。不加接遇。但今朕時。遣使修貢。兼復尋求海上三狩。送使人來。此之勤款。朕有嘉焉。自今以後。如是供奉。厚加恩遇。待以常禮。宜以茲状語汝國王知。壬申。授新羅使薩飡金蘭蓀正五位上。副使級飡金巖正五位下。大判官韓奈麻薩仲業。少判官奈麻金貞樂。大通事韓奈麻金蘇忠三人。各從五位下。自外六品已下。各有差。並賜當色并履。癸酉。宴五位已上。及唐新羅使於朝堂。賜祿有差。壬午。賜唐及新羅使射及踏歌。庚戌。新羅使還蕃。賜璽書曰。天皇敬問新羅國王。朕以寡德。纂業承基。理育蒼生。寧隔中外。王自遠祖。恒守海服。上表貢調。其來尚矣。日者虧違蕃禮。積歳不朝。雖有輕使。而無表奏。由是泰廉還日。已具約束。貞卷來時。更加諭告。其後類使。曾不承行。今此蘭蓀。猶陳口奏。理須依例從境放還。但送三狩等來。事既不輕。故修賓禮。以答來意。王宜察之。後使必須令齎表函。以禮進退。今勅筑紫府及對馬等戍。不將表使。莫令入境。宜知之。[illegible]（續日本紀卷三十六光仁天皇寶龜十一年庚申ノ條）

從五位上百濟王俊哲等言。[illegible]

それから第六に紹介すべきは仁明天皇承和七年庚申の歳の記事であつて下の通りに記されてある。

[illegible]（續日本後紀卷九仁明天皇承和七年庚申ノ條）

こんどはざつとこんな事だけでとゞめて置く。これを機會に追々御紹介を續けたいと思ふ。

京城小學生徒筆蹟

さくらの花 （其五）南大門小學校（尋二）庄田八重子

勤倹業ヲ修ム 櫻井小學校（尋四）岡田節子

朝日に匂ふ山桜花 （尋六）

日ノマル （其六）三坂小學校（尋二）黑木正道

大日本帝國 林七郎（尋五）

眞善美 右より（尋三）西川みつ

青山到る處に在り（中） 日本の過剩人口か=何處に收容す可き乎

外務省移民課長 赤松祐之氏談

我國人口の增加率は年々增上して行くのに土地狹く人口問題に對する憂慮は深きものがある勿論亞細亞大陸の開發經營のために邦人の大陸移住は今後益々多くなるのであらうけれども吾人の天地は必ずしも亞細亞のみ限られるに非ず民族百年の後を思へば到る處青山の地を作る覺悟が要る。吾人は移民の語を譯して出稼となさず所謂『新天地開發』の意となすものである現在我移民は米國に十二三萬人に達せるも其大多數即ち

婦女子を除く 七八萬人に加州に住む三分の二は勞働者である紳士協約締結後に於て十年を經過せる今日猶斯多數の勞働者ありとせば是等の徒は十年を經て尚成功せざるものと見なければならぬ而して彼等の多くは掃除人夫皿洗等で永遠に望を囑するに足らざるものが多くその中稍成功の域に達せりと做さるゝものは農業從事者にて是等は僅ながらも土地を買收し發展を期してゐるけれども種族保護觀念に强烈なアングロサクソン人は是を快しとせず忽ち土地所有權を剝奪し續ては三箇年間の借地權をも沒收せんとしてゐる斯見ればアングロサクソンの勢力範圍で我が民族の發展は頗る困難である 翻つて我が移民の趨勢を見るに北米渡航者の意氣は甚だ軒昂非常の希望を抱いて行くに反し南米渡航者は

殆んど出稼流 の人が多い然るに渡航後は全然正反對の結果となつて現はれてゐる即ち等の點より見ても我が民族の發展地は北米で無いと自覺しなければならぬ即ち最近の北米移民の統計を見るに相渡航者に比して排斥せんとし今や製糖業に從事せる僅二三百人の我邦人に對し

手段を廻らし 追放せんとしてゐる此排斥の最も强烈なるはクインスランドで濠洲西方のツルーム北端に在るモリヨー島の如きも稍激しい然るに該地方に真珠採取に從事してゐる漁夫は殆ど日本人で彼等は是等の漁夫を追放せん爲めに百方策を盡せるも斯業に適當な者を他より採るあたはず已むを得ず永住の居住を認可するに至つた僅に斯業に從事せるものは僅か千二三百名に過ぎず其他は恐く排斥されてゐる南亞弗利加も濠洲と同く白人南亞主義で有色人種に對する排斥思想は最も熾烈である有色人種に對しては絕對に入國を拒絕して居り日本人が如何に移住を欲するも殆ど不可能である斯數へ來ればアングロサクソンの

政權下にある ものは一として我民族に對して徹底的に排斥をなさんとしつゝあるの事實は歷然たるものである然し一世界は猶我民族の發展すべき餘地を充分に有してゐる卽ち南洋、西伯利、南米等は恐く我が民族の發展地にして殊に南米に於ては聊かも排日思想なく又我が民族に對して壓迫的の法律を有せる國も無い（東京支局）

謹賀新年 京城本町二丁目八一 石川物産商會 長電話一八八四番 振替京城二六二〇

謹賀新年 京城旭町一丁目 活版石版和洋帳簿製造 中島印刷所 中島通一郎 電話二千百八番 振替京城一百二番

謹賀新年 京城府本町二丁目 和洋家具類室内裝飾品製造販賣 茶器類一式 增田本店 電話長百〇九番 振替口座七六番

謹賀新年 京城本町二丁目二十六番地 茶茶器類菓子雜貨 砂糖藥罐漬物及水飴 網島商店 電話一九三五番

謹賀新年 京城府長谷川町 中田普成社 雜誌學園編輯部 圖書出版部 電話二〇五番 振替京城四六〇七番

謹賀新年 京城南大門通三丁目 藤木利右衛門 電話一五六〇番 振替一八三一四番

謹賀新年 京城蓬萊町四丁目 李王職御用 東亞牧場 場主 肥塚正太 電話五二一番

謹賀新年 京城太平町二丁目二 東京ゴム輪入力車製造 空氣入車輪タイヤ 其他附屬品一切販賣 クラブ足袋及ゴム製品 堀商店 堀善一郎 電話二二九〇番

謹賀新年 京城北米倉町 西洋料理 新年宴會最好適所 ファミリーホテル 赤瀬仙太郎 電話二二八番

謹賀新年 江景中町 江景信託株式會社 電話二九番

謹賀新年 群山全州通 矢野呉服店 電話三九番

謹賀新年 群山港本町 米穀商 中谷商店 長電話四一貳番

謹賀新年 湖南線江景 三南殖産株式會社 長電話一七番

群山府本町 三南殖産株式會社 群山支店 長電話三壹五番

謹賀新年 忠南江景 荒卷農場 荒卷醬油部 電話一貳三番

謹賀新年 全北咸悅 光岡農場

謹賀新年 全北沃溝郡 宮崎農場 場主 宮崎佳太郎

謹賀新年 全北沃溝郡地境 森井農場

謹賀新年 全北黃登 千々松淸一

謹賀新年 全羅北道黃登 森谷農場

謹賀新年 全北黃登 片桐農場 場主 片桐和三

謹賀新年 全羅北道沃溝郡臨陂面瑞穗 川崎農場 場主 川崎藤太郎

謹賀新年 全北地境 島谷農場

謹賀新年 群山港全州通り 米穀商 廣津商店 電話一壹〇番

謹賀新年 京釜線金泉 龜井商店 電話一七番

謹賀新年 大邱 宮井正一

謹賀新年 大邱慈惠醫院 職員一同

謹賀新年 大邱醫師 池見與五郎

謹賀新年 大邱府南龍岡町 大西鬼三雄

謹賀新年 大邱南龍岡町 辯護士 岩元三志

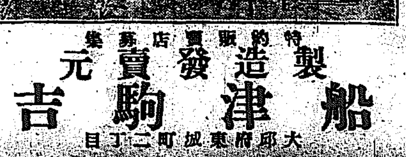
謹賀新年 仁川病院 院長 瀬 併二 電話 事務用五一六番 病室用二〇番 院長室六〇九番

謹賀新年 安東 三省洋行 米穀商 精米部 電話二〇一番 電略(三)又八(三七)

謹賀新年 京城太平通一丁目 鈴木重成 電話一六〇二番

謹賀新年 京城明治町二丁目 傘提灯 大島商店 電話一六三五番

謹賀新年 日鮮號製織莚叺機械 專賣特許 第一四五六五號 第一四八三四號

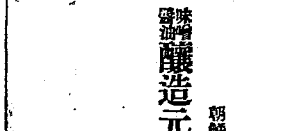


製造發賣元 特約販賣店募集 船津駒吉 大邱府東城町二丁目

謹賀新年 京城黃金町二丁目 京城石油共同販賣組合 電話二一九四番 組合員 釘本藤次郎 共益社 梶原末太郎 前田悅造 淺海助太郎 鬼頭千藏 福田又支店 支配人 鶴田網太郎

謹賀新年 安東縣大和橋通七丁目 一鶴 本莊酒店 電話百十七番 同 白鶴 市場通四丁目 鶴屋酒店 電話三一二番 同 白露 大和橋通七丁目 村木洋行 電話六七番 同 金露 四番通七丁目 大塚出張所 電話三一番 同 白菊 菊正盛宗 市場通三丁目 福田商店 電話三〇番 同 櫻正宗 大和橋通七丁目 三巴商店 電話三四番 同 白鹿 四番通三丁目 宮川酒店 電話三一〇番

謹賀新年



味噌醬油釀造元 辻謹之助 朝鮮大田本町三丁目 振替京城二六九番 長電話五十八番

謹賀新年 海陸物産委托業 貿易商 主一商會 崔演詢 崔保遠 李有龍 白龍水 張鎭錫 權五鵬 武孫永 卿安植 石黃鎭 水朴龍 錫權奉 鵬尹夢 詢遠赫浩一蘭

所作事『靭猿』の型 (三)

＝常磐津『花舞臺霞猿曳』＝

矢橋小龍

こきつぱり云はれて猿曳與四郎は、思はぬ言葉に游き、兩手を後について、嘘でないかと不審の表情から悦びの表情に移つて、這ふやうに兩手で前にいざりながら。

(與) ね、、そりやまア誠で

こ中腰に立つて、

(與) ござりますか。

こ云ひつゝ兩方の肩でしなを仕て、べた〳〵こ坐る。

(大) おいのう。

こ泣き落す、それを聞いて與四郎は、はツこ打ち伏し、

(與) 嬉しや〳〵、御禮に猿を舞ひませう。

こ悦び極まつた表情で云ひ、正面向きに狂言の構へに構へて

(與) 天下泰平、御武運長久御祈禱に猿が參つて能仕る。

こきつぱり云ひ、チャチャチャヤンラン、チャンランの合の手にかゝつて、猿を右の手で小手招き、腰を取つて、猿を連れ後見座に入る。

そこで狂言の肩衣を取り、腰の代りに扇を持ち、右の手で猿の額に手をかけ、右の手の扇を猿の頸にかけた形で正面向きに直るのが『御知行も』で大小鼓入り合方になり、摺り足で五六歩前に出て坐り、扇を前へ置くやうに、猿に辭儀をさせながら自分も頭を下け『まさる目出度き、踊るが手元』で自分だけ立ち上がり、すぼめた儘の扇で、左右をして、三足出ながら扇を開いて控へる。チリンテ、チリンテ、チリテッテンで左から右へ踏み、ツテテン、ツテテンで左こ、二足踏み『面白や』で扇で揚幕を差し、右から廻つて前向きになるこ同時にトン〳〵こ踏み、首を振り『ハンヤコリャコリャ』で左足を上けて片足で三度飛び上がり、廻つて上手向きになる、トチチリレン、トチチリレンで小猿をあやなす心で兩手で交る〳〵招く形を仕ながら猿に呼びかけ『黄金の數々積み揃へ』で、肩の上へ、黄金を積む仕科をし、兩手をかけて猿に與へる形をする。

此の時大名が橘の折枝を持つて出るのでそれを與四郎が扇で差して、手を打ち合せ、ヤットントンこ踏み、又右で指差して同じく踏むので、猿がその方へ飛んでゆく『庭の黄金の花盛り』で與四郎は兩手で扇りながら、輕く足を上げて一廻りし、大名は橘の折枝を猿に示してじやらしながら同じく一廻りする『花も實も榮う目出度さよ』で、猿がいらつてキャツこ叫び飛び立つので、大名は驚ろいて上手にこび退く、與四郎も輕く跳いて中を引き分け、舞臺まん中に、猿を右脇に抱へて、その頸のこころへ、開いた扇を蔽して見得になる。大名は左に橘の折枝を持ち、右の人差し指を右の目の下へ當て、ベッカッコウをする『さらば我らは御暇こ行く〳〵を引き止め』で扇を納めて前に挾し、猿を背負つて上手に行きかゝるこ、大名が追つて來て袖を控へる。

(大) これ待つた。

こ首を三つ振つて云ふ。常磐津『そりやまア何の事ぢやいな』で、奴が猿を曳きおろす。猿曳が行かうこするのを、大名が引き戻す振りが二度あつて、三度目に、上下に入れ交り、右の肩を三つに押されて、一旦下に[illegible]り、大名に挪はれてギバをしに坐つて腕を組み、困つたこ云ふ思ひ入れで首をすくめる。『わたしやお前に打ち込んで』で猿曳がその形の儘でゐるこ大名が兩方の袂を持つて、『誑されて咲くり』で寄つて來て『コレハ何ぢやい』で大名に右の手を取られて引き起され、向ひ合になり、互ひに兩手を持ち合つて一旦一所に坐り、與四郎は兩手を握つて右の足を入れ、裏向きに身體を返し、更に前向きになつて右の足を上げた儘、擺つたまゝの手をすくめて、大名も反對の位置で背中合せに同じ形をしてゐて『エ、室の梅』で、大名は右の手を高く上け突つ立ち、與四郎は右の足を下手へ延ばせて、矢張り右の手を上げて突つ張りかへるのが、老木の梅を見せた振りこなる。

『笛鳴きかける鶯鳥榮』で、與四郎は右へ一廻りして前向きで坐つたまゝでゐるこ、大名が蹴るの御背を叩く心で手を打ち合せちよつこ上手へ追つてゆき『なご納豆の網毎に』で天秤棒を擔ぎ、右の手を擺つて肱を張り納豆賣りが賣り歩く振りをし『飛んで行きたや主の側』で兩袖を翼に見せた形を二度し、更に膝で二度、與四郎の背中を突き、三度目に外され前へちよいこよろける、その隙に與四郎は後見座に逃け込んで入る『見れば見る程くつきりこ、水際のたつたよい男』で大名は、下手に控へたる奴小手を取つて、舞臺眞ん中に据ゑ、下手から、奴の腰に手を乘せて、恥かしい思ひ入れの惡身をするこ、又その隙に奴は下手へ逃けて入る『床やま』で大名の一人舞臺こなつて、兩手で悶なやうな形で頬に當て、南瓜を見せ、三前へ出る。『さいかち原の中までも』で手を前へ來の蔦の心に出し、足を拾ひながら右へ一廻りする『こちやお前こならば闇やせぬ』で袖を振つて前へ出て、兩袖で顏を隱し、又開いて顏を突きだし又隱す。此の時上手に與四郎、下手に奴、顏向きにすまふ。

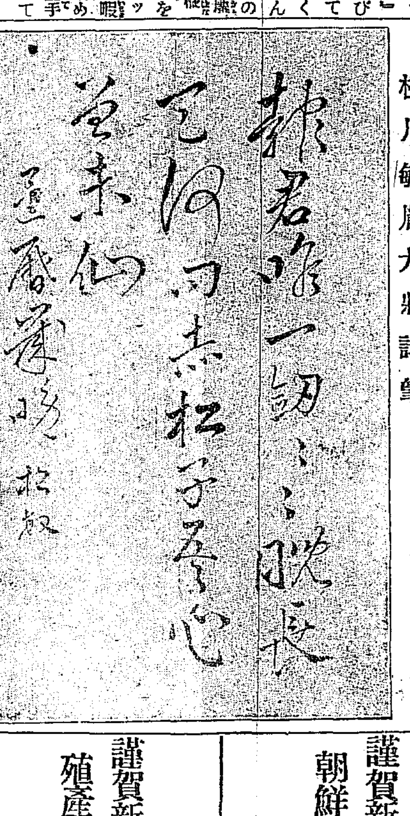
『お前こ夫婦になるならば』で正面向きに坐つて、兩袖を膝に乘せ、兩方の人差指を揃へて夫婦をきかせ『お聟や好きな團子を』で甘聟を割る形をし、更に串ざしの團子を頬張る形をし、『斷ち物したが憎いかね』で兩手を前で打ち合せて握り、左の足を深く入れて、きりゝつこ廻りその手を右脇に構へるやうに置いて顏を三つに振つて極る『エ、女子には何がなる』で兩袖を持ち、右から左こ、袖で男を打つ振りをし、左足を入れて、廻つて後向きになり、三逝すべつて右足をトンこ踏んで突ッ立ち直にベタリこ坐る『焦れ〳〵しお姿を』で、二十四孝の八重垣姫の身振りで先づ、兩袖を持つて、右傍に置き、首を傾けて繪姿を見る形、次に左でその通り繰返し『チンチン絡には書かせはせぬものを』で、ちよつこ中腰に立ち、兩手を卷いて右から左こ、後へついてそり返り、左から首を振つて、又繪姿を見る形『オイ惚氣ぢや惚れたが分るまい』のオイの懸け聲に合せて手を打ち、次にトッツンで舞臺を二つ打ち、膝こ足の甲こで間を取つて、トコトン〳〵こ踏みながら立ち上がつて一廻りする『チンチンテンレン、トッツンテレン、まひまひ廻る煤拂ひ、枝も榮ねて葉も茂る、お目出度や千代の子お目出度や〳〵』で、此の間、大名は兩袖を持つて、尻み振りながら惡身で儀こびに與四郎の傍へゆくこ、與四郎に挪はれ、よろけながら眞ん中へ戻り、更に奴の方へ同じ事を繰り返し、眞ん中に戻るこ、奴こ與四郎がチンチンテンレンの拍子に乘つて、浮かれ氣味によつて來て、大名を手車に乘せて一廻りし、ごつこ打ち捨てる心で下に置き、互ひに指さして笑ひながら下後見座に入る『おきよ所の、おほ、、おほ、おほ、おほほ、、、』で猿が大名の打ち捨て、置いた橘の折枝を取つて、枝の折口で大名の後から脇の下をくすぐるので、笑ひくづれる振りを仕ながら下に居る『オイ笑ひ草』で大名が橘の折枝をよこせこ云ふ心に右の手を出すこ猿が平手で打つのが、オイの懸け聲に敏り、左右へ廻つて大名は袖口へ兩手をいれて上ドにした形、猿は折枝を右に提前の返報で、左手でベッカッコウをして極る。

常磐津『おどけ雜りに小宦の小影の、小暗い所で夜のおこごかねんねもさる座頭、二人袴の綻びし、中を押へて、やるまいぞ〳〵、花盗人をやるまいぞ、おのれ逃けよさておいそれさ、やつちやしてこい不寢の番、棒こ手拭、枕もこ、つかれにたわい轉寢の、寢息伺ひ寄る鼠、そろ〳〵這ひ出しちよつかいに、箸箱、膳桶を踏み荒したる畜生め、これもくらはず樫の棒、すぢつてもぢつてかぎやりや、エイエイトウトウ、やつこう納太刀、豐の御代の一踊り、一の幣立てこの幣立て、之に黒駒信濃を通る、船頭ごのこそゆうけんなれ、泊り〳〵を眺めつゝ、千秋や萬歳こ儀を重ねて面々に、樂うなるこそ目出度けれ、立ち舞ふうちに以前の小猿、あたりの梅へ飛び上れば、見るより吃驚、アレ〳〵猿が梅の梢へ、コレ大夫おりて呉れ

『チャ、チャラツ、チャチャラツ、さうに三人立ちかゝり、屆かぬ梢の綱渡り』で、猿はキャツ〳〵こ云ひながら、上手へ大名を追つてゆくこ、あこより與四郎が追駈けゆき、猿の肩へ手をかけて止める、大名は下手へ逃けて行き、奴の腰へついて隱れ、更に子を取ろ子取ろの振りで與四郎こ猿が、鬼の心になる『三筋の假猿曳や』で上下へ大きく入れ代り、『橘花熏る花舞臺、笑ひ興じて祝しける』で、與四郎は猿を背負ひ舞臺眞ん中まで來るこ、大名は奴の腰についたまゝ、舞臺眞ん中で行き合ひ、右左こ奴が大手をひろけてさゝへる形をし、與四郎がそれを潜り上手へ逃けて行かうこするこ、大名が首を突き出して舌を出すので、驚いて下手へ逃けてゆくこ奴が兩手をひろけてさゝへるので、又眞ん中に戻り、右足を大きく踏み出すのが、折頭で、右の手で扇をさらりこ開き、右の頭の上へ翳し、右の足にかゝつて左向きに見込んだ形、大名は兩袖を持つて身體をひねり、首を前へ突き出した形、奴は更に右の足を踏み出して、左にかゝり、兩手を大きくひろけてさゝへる形に極る。三人が揃ふの見得で大拍子、幕。(完)

靭猿の型 (段四郎)

松川敏胤大將試筆



新春低唱

大東夢路(京城)

□

曉の風おだやかに春立てばかけの鳥はも高啼きにけり

赤土の高麗の山なみ茜さし風紺碧に晴れ渡りたる初春の空

おころへし今朝の春かなのしたびに吾もたぬしめり

道端に羽根突く子等の振袖の和らに搖れて眞陽のかゞよふ

謹賀新年 群山府全州通 貿易商 朝鮮物産商會 電話長三二四番 電略(チフ)(ハ)(テ) 振替京城四七五番

謹賀新年 全羅北道群山府 鮮南勸業株式會社 電話三三〇番

謹賀新年 朝鮮銀行木浦支店 電話一一番

謹賀新年 殖産銀行木浦支店 電話二四六番

謹賀新年 十八銀行木浦支店 電話一八番

謹賀新年 朝鮮興業株式會社 木浦管理所 電話一〇九番 國武農場木浦支部 電話三七番

謹賀新年 朝鮮實業株式會社 木浦支店 電話一三六番 鎌田産業株式會社 木浦支店 電長一二〇番

謹賀新年 木浦府壽町一丁目五番地 朝鮮棉花株式會社 電三〇〇六 三二四番

謹賀新年 京城消防組 組頭 伊藤友松 小頭 安達久四郎 小頭 中島儀三郎

謹賀新年 各種敷物 全南京消火器 室内裝飾品 洋家具類並 京城本町一丁目 横山隆一支店 電話長一六七番 本店 神戸市元町一丁目 電話本局八〇四〇 支店 慶北電文武街一丁目 電話七六二

謹賀新年 東京京橋區銀座通一丁目 日華生命保險會社 社長 川崎 京城黄金町二丁目八八 日華生命保險會社 朝鮮支部 所長 小沼千鎚 電話長二三二番

謹賀新年 京城本町二丁目 賣藥 雜貨 目之出商行 電話九五六番 京城明治町本町角 同支店 小賣部 電話二七六番

謹賀新年 京城南大門五丁目 諸物賣入商 早川商會 電話二七六四番

謹賀新年 京城黄金町三丁目六七 新古鋼材料商 岩吉改め 坪内順三郎 電話六九六番

謹賀新年 黄金町二丁目(明治町通) 電機陶磁器並材料器具販賣 電氣工事請負 加藤商會京城支店 長電話一四七二番

謹賀新年 自轉車 人力車 ダンロップタイヤー特約販賣 卸小賣 イバラキ自轉車商店 黄金町二丁目百廿二番地 電話二九二七番

謹賀新年 京釜線金泉 東雲樓事 中村常一

謹賀新年 大邱府東門町 產婆 門田キク

謹賀新年 長春東十二區 建築材料 諸金物商 西脇洋行 電話一四〇番

謹賀新年 明治護謨製造所 英國ノーザン火災保險會社 代理店 海陸用諸機械器具直輸出入商 米井商店 京城出張所 京城黄金町一丁目 電話一六九六番 本店 東京銀座

謹賀新年 釜山府尹 本田常吉 寺島利久

謹賀新年 慶尙南道晉州 清水佐太郎

謹賀新年 朝鮮大田驛前 小野運輸組 小野好藏

謹賀新年 印章百般並に附屬品販賣 バイン萬年筆特約店 群山府 光富文珠堂 電話二五八番

謹賀新年 群山港 辯護士 大坪龍三 電話一五九番

謹賀新年 群山大和町 群山齒科醫院 院長 醫學士 日本齒科 野中松太郎 電話四三二番

謹賀新年 群山港本町 大平德二郎

謹賀新年 新義州本町 渡部運送店 電話四五番

謹賀新年 群山驛長 吉川藤平

謹賀新年 群山公立普通學校 井上瀷

謹賀新年 群山全州通 田中陶器店 電話一一三〇番 振替京城五一六六番

謹賀新年 京釜線天安 雜貨商 津川八十松

謹賀新年 長春 石炭特約販賣 吉林木材 各種煉瓦製造販賣 泰山行 電話一五六番 一二〇番 大連振替九一二六番 吉林 泰山行 電話二八三〇〇番

謹賀新年 大邱府八雲町 小口組支店 慶北安東 同 支店 忠南太田 同 支店 全南羅州 同 支店 龍山漢江通 同 支店 忠南鳥致院 同 支店 慶北醴泉 同 支店

謹賀新年 大阪商船株式會社 群山代理店 電話長一〇番

大阪上火災保險株式會社 大同生命保險株式會社 木材商 大澤商會 電話長一五四番 振替京城八六二番

謹賀新年 群山府本町通り 店主 大澤藤十郎

謹賀新年 營業科目 汽船帆船取扱業 海運通關貨物取扱業 帝國通運人足請負業 信託株式會社代理店 東洋海上保險株式會社代理店 群山港 谷口回漕店 店主 谷口伊太郎 電話長一四〇番 振替京城六六五四番 谷口旅館 電話長四九番

謹賀新年 安東縣旅館組合(イロハ順) 花園旅館 電話三七三番 松屋旅館 電話一六六番 元寶館 電話四五番 富久壽美旅館 電話四七番 安東旅館 電話五七番 日の出旅館 電話二七〇番

謹賀新年 龍山驛前 太陽館本店 電話長一六番

謹賀新年 信託業 渡邊與三郎 新龍山漢江通一五 電話五〇番

謹賀新年 龍山元町二丁目 醬油味噌業 兼古禮藏 電話一四一番

謹賀新年 龍山元町四丁目 漢江河岸電車終點 共樂社遊船部 電話五三八番

謹賀新年 龍山漢江通三丁目 丸佐被服店 電話一叁六番

賀正 清酒 鯉正宗 高砂菊 濁酒、味醂、燒酎製造販賣 朝鮮京城府龍山停車場前 丸三酒場 場主 宮原藤太郎 電話二〇三番 振替京城一九六二番

謹賀新年 龍山榮町 度量衡器 賣藥雜貨 椋橋商店 產婆 椋橋ミネ 電話三二六番

謹賀新年 京城黄金町一ノ八〇 本明雜木店 本明卯下 電話長三一七五番

謹賀新年 京城本町三丁目 岩見屋吳服店 電話一三三三番

謹賀新年 德田商會 和洋建築材料 德田高二 京城永樂町二丁目 電話二三二五番

謹賀新年 京城明治町二丁目 福田屋壽司店 電話一三一〇番

謹賀新年 京城南大門通一丁目 瀨戸商店 電話長二七一七番

謹賀新年 長春東斜街 和洋紙 帳簿 文房具 洋酒 各種 和洋菓子 各種 金庫 日本生命代理店 林洋行本店 電話一六〇番 振替大連一三五五番 同 吉林 林洋行支店

謹賀新年 吉林省城商埠地(日本總領事館向) 名古屋旅館 電話二百二番 懇切丁寧主旨 新築落成 總坪數三百七十餘 館の特長 ○スチーム設備アリ各室共ニ春季ニ異ラズ ○玉突場圍碁將棋等ノ娛樂設備アリ ○清淨ナル温泉的浴場アリ快ナル御感アラシム

謹賀新年 乘合自働車 伊藤自働車部 大邱‖尙州‖忠州間 大邱元町 電話六三六番 忠州扱所 軒谷市松 金泉‖尙州‖乃城間 金泉驛前 乃城扱所 電話一四番 菊原仙藏

謹賀新年 御料理 朝鮮 會席 富士 大田春日町 草野富士太郎 長電話五七番

謹賀新年 門司市祝町五丁目 關門畜產貿易株式會社 電話特長七〇六番 長六九一番 電略カチ 京城櫻井町一丁目五十六番地 京城出張所 電話二〇〇九番

謹賀新年 資本金五百萬圓 營業主項目 建築及貸家業 大連市三河町三二番地 滿洲興業株式會社 社長 安田善三郎 常務取締役 福山義春 支店所在地 鞍山、奉天 出張所所在地 東京

謹賀新年 大阪商船株式會社專屬荷客取扱 南滿洲鐵道株式會社貨物取扱 大連市山縣通 山口運輸公司 電話五二四四・三六九・二三六九番

賀正 優等清酒

廣島縣西條町 醸造元 賀茂鶴酒造株式會社 發賣元 京城府鍾路公平洞 河野酒店 電話三一〇八番 京城本町三丁目 河野支店 電話一〇七番 特約店 龍山元町二丁目 松屋商店 電話六六二番

謹賀新年

慶尙北道廳員 (いろは順)

丹朴吉高谷竹中栗安松園有雨宮圖

羽 山栁林 石原井浦田賀 宮崎藤

茲 性文又幸規 豐

一三次矩 吉次重哄彦之 宇伊唯

夫宙郎郎夫丸郎喜哉一進八吉平

賀正 釜山府佐一町九番地 朝鮮興業株式會社 釜山支店 電話一〇七三番

賀正 釜山府本町四丁目 米穀 雜貨 貿易商 泰共商會 電話七二五番

ミツワ石鹸

謹賀新年

歳玆に新にして國運彌々興隆、寔に維れ聖代の嘉祥、皇國隆昌の春なり、謹んで　聖壽の無疆と邦家の盛榮とを祝福し、併せて江湖各位の健康を祈る

本店曩に他に卒先してミツワ化學研究所を設立し、科學的經營の主義に則り、專門的研究の下に、科學に基礎を置ける特徴を具備せる商品の發賣に努力し、販賣其他も亦科學的經營に依り、孜々營々、幸に各種發賣品の聲價日に揚り、販額の激增甚しく、業務の進展著しきものあり、これ科學に根底を置く現代式經營の然らしむる所なりと雖、亦偏に江湖各位の深甚なる愛顧の賜に外ならず、本店の感佩措く能はざる所なり

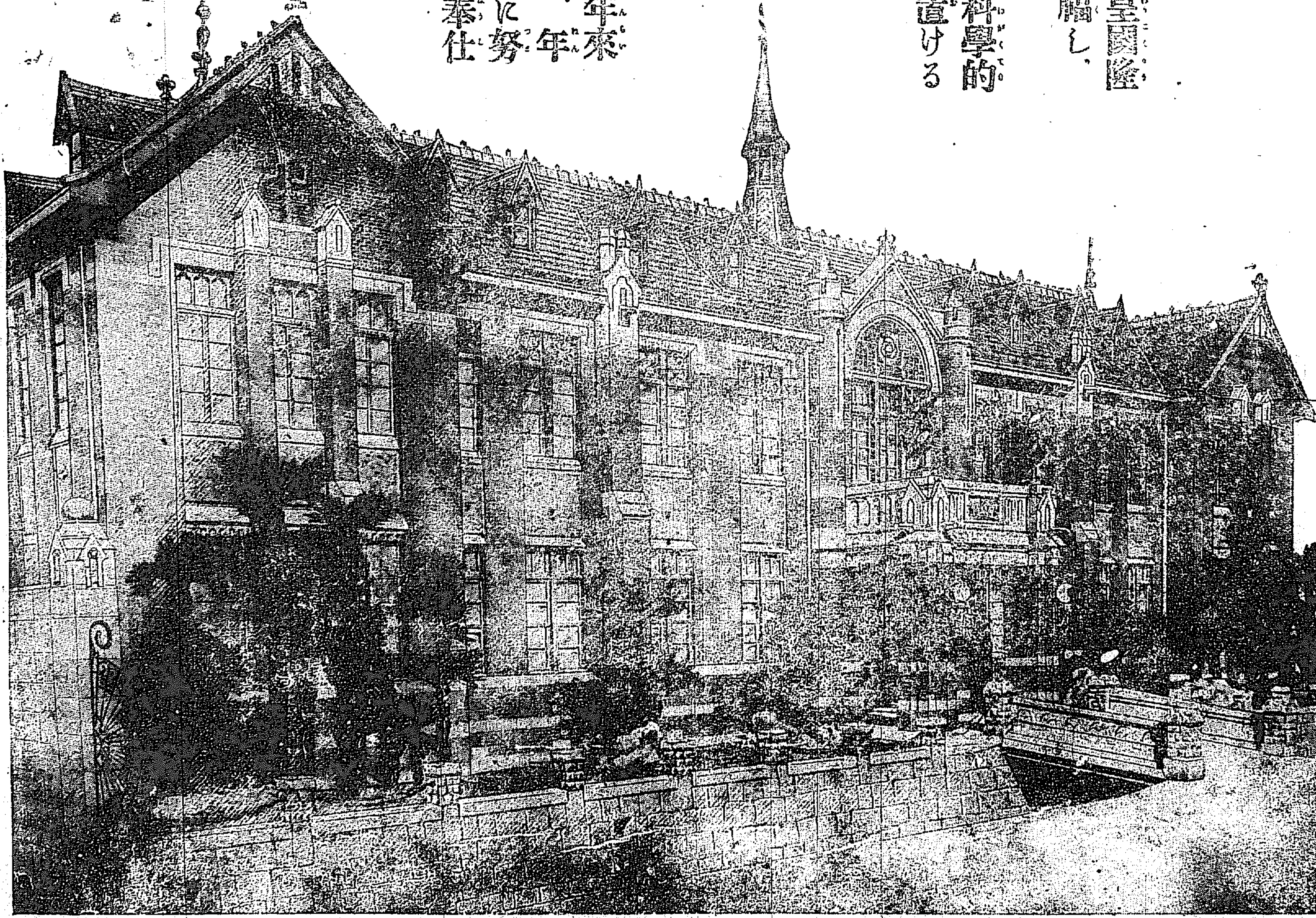
今や年頭心氣清新なるに際し、更に發奮精勵、殊に年來新樣式の下に設備の万全を期せる向島新工場は完成し、年初其業緖に就くと共に、益々發賣品の優秀を期し改善に努め、聊か本邦化學工業界に寄與し、江湖多年の眷顧に奉仕せんことを期す、希くば本店の微衷を諒察せられ、倍舊翼贊の仁慶を垂れ給はんことを、蕪辭、年頭の祝詞に代ふ

大正九年新春

ミツワ石鹸
ミツワ家庭藥
ミツワ椿油
ミツワ人參葡萄酒
ミツワ規那鐵葡萄酒
肝油ドロップス
御園化粧品

發賣元 ○

東京市日本橋區橘町四丁目
藥劑、賣藥品、石鹸、化粧品、小間物問屋
登錄商號 丸見屋商店
電信略號○ミヤ……振替口座東京七一〇番
營業部電話浪花 三〇・四四八・四四九・四五〇



落語　錦木

朝寝坊むらく口演

一席御披露をいたします人の出世は判らぬものでございまして、俗に一夜檢校なぞと申しますが、昨日まで身貧に暮した者も今日は大勢の奉公人を使ひ、旦那々々と尊敬されまして立派な身分になります女も矢張り然うと同じやうに裏店の娘がお豆腐を買ひに參つた歸りがけ。『寄れツ』鰲いて味噌漉を提げたなり蹲踞んで居ります前を通行したはお大名、お駕籠の中から其の娘を御意遊ばして、美しい女であると思召すと、ソコはお大名の威勢は剛氣なもの、お屋敷にお歸りになる、其の娘の身元を調べさせますと、貧しくは暮して居るが兩親も至つて正直な者だといふソコで兩親を拵へてお屋敷へお召しになりましてこれがお妾になる、間もなく姙娠して御男子御出生、斯ふなると大したもので、妾には兄がございますから何うぞお目通りを仰付けられてと頼みますと殿樣が、直に沙汰をして其兄さんがお目通りを許され役でお侍になります、古い川柳に『妹のお陰で馬におぶッさり』甘い事を申したものでございます、此のお妾が馬鹿に運が好いから、生み落した御男子も御運が良いかと思ふと然う甘くはまゐりません、お兄いさんが御家督こして自分はお下屋敷に引移り、御用人の世話を受けることになりましては誠に心細い是れは牛込の矢來にお上屋敷がございました酒井雅樂頭樣、芝居でいたしますと山名宗全と申しまして、仁木彈正に加擔をする人で、敵役でございますが其實は然う云ふお方ではないさうで、德川の四天王のお家、大層な見識のあつたもので、此雅樂頭樣から四五代目の殿樣でございました、其の御次男が角太郎樣と申しまして、廿歳を越ねた事二ッばかり、大塚の下屋敷に居らせられます、前にも申し上げました通り御用人の吉兵衛と云ふ方が大層忠義で色々お世話をいたし、氣の成る丈けかゝらぬやうこ、時機を見ては兩國又は上野の山下なぞの盛り場へ御案内をして珍らしい物を御覽に入れる、例へお部屋住でもお大名の若樣でございますから下々の事はとんご御存知がございません　吉『何方にお出でになりました、餘りお歸りが遲なはります故只今所所を尋ねましたが、誰も貴下を見た者が無いこのこと、大きに心配いたして居りましたが、何方へお出になりました』角『ウン兩國へ參つた』吉『大層御遠方へお出でになりました』角『河童の瞞せ物を見て參つた、水の中から赤いものがヒヨコ〳〵浮き上がり、笛の樣にキイ〳〵と申したが彼れは河童ではあるまい、作りものであらう』吉『御意の通り香具師どもが左樣な物を拵へましては、江戸慣れぬ人々を愚かして金錢を取りまする』角『アー左樣であるか』吉『御空腹でございませう』角『イヤ空腹ではない、食事をいたして參つた』吉『何方でお食事を遊ばしました』角『東兩國の傍に駒止あこいふ小橋がある、彼橋の少し先に參ると繩の暖簾のかゝつた家で酒食を商ふ其家へ這入つて煎豆腐に豆糟汁で食事をいたしたが餘り甘くも思はぬ、然し下直であつた』吉『是れは恐れ入りました、爾來左樣な處へお入り遊ばしては宜しくございません』角『以來は愼むであらう』吉『時に若樣、お肩が凝ると仰せられましたが、按摩を頼み置きましたる處先刻より參りまして彼處に控へて居ります』角『アー彼の次の薄暗い處に居る坊主が按摩こ申す者か』吉『御意にございます』角『始めて見たが妙なものだ、コレ〳〵按摩こか云ふ奴是れへ參れ』按『へヽー』今日は結構のお天氣で』角『モソット前へ參れウーン、面白い顔を致し居る奴ぢや、コレ〳〵目を開けよ、遠慮いたすな』按『へゝ、御冗談被仰つちやア不可ません私は盲でございます』角『盲である、其方は盲人か、それは不愍な事だ貴樣だナ、折節ピイ〳〵笛を吹いて往來致すは、先達て吉兵衛に尋ねたるにあれは按摩の笛だこ申した』按『左樣でございます時々仕事が暇だこ流しに出す』角『何を流しに參る』按『イエ笛を吹いては表を歩きまして、療治をしてくれこいふ方があるこ其家へ參つて按摩を致します』角『左樣か、サ、肩を揉んでくれろ』按『御免下さいまし、大層凝つて居りますな』角『書見をいたすこ何うも凝が來て不可ぬ』角『左樣でございませう、時に貴下樣は何んでございますか、御當家樣の御親類の方でですか』角『イヤ俺は藩中の者だ』按『へエー、御家中の方で、何んですかな學者なんこいふ者は嘘ばかり吐くもんでございますな』角『何で學者が僞りを申すこいふか』角『私は月六歲に本所の一ッ目の總錄屋敷へ參ります、旦那樣は御存知はございますまいが、總錄こ申しますこ盲人の頭でございます、其處では揉療治も敎へまするし、折節學者が來ては講釋をいたします、其の時に傑いふ骨組の者は男ならばお大名になり女ならば其の奧樣になり、盲ならば檢校になると申しました、私の師匠が是れは勾當でございますが、先達て私の身體を撫すつてお前は檢校になる骨組だ辛抱しろと申しました、それから私が療治を僞ながら多勢の人を試して見ましたが、何の方はございません、所が貴下の身體が敎へられた通りの骨組みでございますが、然し御家中の方だこ被仰いますが、御家中ではお大名にはなれませんこ存じます、甚だ失禮でございますが』角『ウン、陪臣から天下の諸侯にはなれんの、亂世なら知らぬこご、太平の世ではなれん』按『なれないとして見ると學者がチヤラッポコを言つたものでございます、盲目ばかりだと思つて馬鹿にして居るんでございませう』角『成程、然し人の出世は判らぬものだ、大名にならぬとは限らぬ』按『然うでございませうが、御家中の方ではお大名にはなれますまい』角『先づ然うであらうの、就いては其方であるが、何か望みがあるであらう例へ盲なりとも望みがなければ生きて居てもつまらぬものぢや』按『それは私も望みがございます』角『何ういふ望みがある』按『金が欲しふございます』角『金を何にいたす』按『何にすると被仰いますが金が無ければ官位が昇りません』角『白痴た事を申すなり金で位が買へるか』按『へエ買へない事はございません、千兩金を持つて京都へ參りますこ檢校になれます、檢校と申せば盲の行き止りでございまして、然し千兩なんて金は生涯探ることも出來ますまい』角『なれぬこともあるまいが成程千兩を申せば大金である、然し俺が若大名になつたならば千兩遣はして檢校に取り立つてやらう』按『へイー有難いことで、然し却々なれますまいな』角『先づなれんな』按『然て見りやア鐵の云ひ損だ』角『力を落すな、時に其方の名は何こいふ』錦『錦木と申します』角『大美しい名であるが顏が汚いな名は其人の態を現はさんぞ』錦『旦那はお口が惡うございます』角『何歲の時から盲になつた』錦『七ッの時に疱瘡が目に這入りまして、目の療治をして居れば命が無くなり、命の方を助けやうとすれば目が無くなるこいふので何うも目は見へなくこも命の方が大事だこいふので、何うかかうか命丈けは助かりましたが目は潰れてしまひました』角『それは氣の毒千萬、然し樂みは何が一番面白い』錦『然うですな、マア聽くもんでございますな』角『何を聽けば面白く思ふか』錦『落語が罪が無くつて宜しうございます、時々一つ事ばかり云つて居るやうですが、昔噺家が拵へたもんだこ見へまして能く出來て居ります』角『正落語こいふは何だ』錦『可笑いお話でございます』角『それでは笑話であるな、唐土には笑林廣記なぞと申す笑話のみ載せし書物があるが、是れが却々面白いものだ』錦『大方然ういふものから取つたのでございませう』角『デ其落語こか申すものは誰が喋舌る』錦『それは貴下落語家が寄席へ出て喋舌ります』角『落語家こいふは何だ』錦『落語家は落語家でございます』角『矢張り人か』錦『人でないものは落語は出來ません』角『イヤそれは最もぢや、其寄席こいふは何だ』錦『億う判らなくつちやア困つたな』角『何か申したか』錦『イエ何、寄席こいふは落語家の出る處でございます』角『左樣か、何ういふ講談をするか、存じ居らば聞かせてくれろ』錦『ヘエー、デハ旦那、お療治をしながらお話し申しませう』盲は記憶の宜しいもので寄席で聞いて參つた話を受け賣りをいたしましたが角太郎樣は始めて懸ういふ事をお聞きなされたのでございますから腹を抱へてお笑ひになり　角『療治はモー宜い、今一つ其落語を聞かせろ又明日も參れよ』錦木はお得意が一軒殖ゑたこ大喜び、其の日は歸つて翌日又參りまして療治をしながら落語をする、親しく御出入りをいたしまする内に此の角太郎樣の身分を知りました、若樣〳〵こ云つて能く御機嫌を取る、すると二月ばかりパッタリ錦木が見ゑません、何うしたかこ案じて居りましたが、前申上げた通り人の出世は判らぬもので御本家の御當主が御病死を遊ばしたに就いて、子供衆の無い處からお控への角太郎樣がお乘り出しこなり、酒井雅樂頭樣こ任官遊ばしました、立派なお大名になりました、それに就いて今まで能くお世話をいたしました吉兵衛が御家老に出世をする、此方は錦木でございます、二月餘りドッこ床に就いて漸く三月目に床を上げるやうな事になりました、何うせ裏長屋でございますから空氣の流通も惡し不潔ではありますし、病後の者の居る所ではございませんが、貯へも無い盲の事、何うも仕方がございません　○『錦木さん、何うしたネ、イヤー大將生つて居るな、大分血色が宜い』錦『佐兵衛さんでございますか、昨日湯に這入りまして、エー大分心持が好くなりました』佐『快いに任せて睥はづみな事をしては不可ないよ、今だから話すが、一トしきり長屋の者は誰一人こしてお前が此世の者にならうこは思はなかつた、まア運が宜いんだ』錦『何うも有難うございます、今度は皆さんにお世話になりました、何しろ身寄り親類の無い私は獨身者でございますから、病ひますこ何うするこも出來ません、お長家の衆が御親切に世話をして下すつたのでやう〳〵命を取りこめました、有難ふ存じます』佐『まア宜かつた、人間は然う惡い事ばかりは無いから今度は宜い事が廻つて來るぜ、七轉び八起だな、それに就いて錦木さん、お前向ふ屋敷へ療治に行つたネ』錦『エー參りました』佐『アノ清水さんと云ふ御用人の處の角太郎樣こいふ方を知つて居るかエ』錦『知つて居りますとも、私が能くお療治をいたしました』佐『彼の方が今度御本家へお乘り出しになつて、何うだエ、お部屋住みが一足飛びに御相續人になつたこいふんだが大した出世ぢやアないか』錦『エッ、御本家エ、有難い、サア檢校だ、千兩だ、有難い』佐『未だ快くねぜお前』錦『是からお上屋敷へ參ります、清水樣もお出なさるに違ひない、檢校だ〳〵』こ申しますて夢中になつて杖を力に家を駈け出しました、矢來の酒井樣の表門へ參ります　錦『お願ひ申します』門番『何處へ通る』錦『大層な事を言やアがる、俺は檢校だぞ』門『何だを云ふ』錦『御家老の清水樣のお小屋まで通ます』門『左樣か、案內して遣はす』盲の事でございますから門番が清水吉兵衛樣の小屋まで連れて參りました　吉『オー錦木か、能く訪ねて參つた病氣こいふ事は聞いたが、何しろ急の事であつたから知らせる事が出來なかつた、御前が毎日のやうにお前の噂をいたして居る、直にお目通りに出るやう』吉兵衛さんが錦木を連れて御前へ出でました、雅樂頭樣は御機遊ばすこ　殿『オ、錦木か、能く見へた、不快こいふ事は承つて居つたが、これ面を上ろ、大層痩たナ、然し早速の全快芽出度く思ふぞ』錦『恐悦を申し上げます實は今日お隣の佐兵衛さんから聞きまして、急いで參りました』殿『ウン、大塚に居つた頃約束いたした事がある、望み通り檢校にして取らする』錦『有難い仕合せにございます』殿『予に大名の相があると申したが果して今日の身分に相成つた、又其方に檢校の相があると申した由果して其方も檢校に昇進することが出來て何より芽出度い』錦『お恐を申しあげます』直に御手許金千兩を下されて一夜に此盲が錦木檢校と相成りました、當に珍らしい出世で、然し御苦勞をした殿樣でございますから、何から何まで御存知でございます　殿『錦木見へたか、吉兵衛の宅へ立ち寄つたか』錦『只今清水樣から承はりましてございますが、お上は此度御乘馬をお求めになりましたさうで』雅『如何にも南部産の逸物を求めた栗毛の良い馬である、只今馬場に牽かせる故、見る……譯にはなるまいから、探れ』錦『ハヽ、何んと申します』殿『三味線栗毛と申す』錦『是れは珍らしい名でございます、私は盲の事でございまして、古き書物なぞを見ることは出來ませぬが、承はるに唐土にて關羽の乘りました赤兎馬、我が日本にて小栗助重の乘馬が鬼鹿毛、元曆の元年宇治川に於て先陣を爭ひました、佐々木梶原の乘馬が池月に摺墨、又權現樣長久手御陣の節に召されしは鶚巻き……』殿『錦木、吉兵衛より申付けられて意見に見へたな、三味線栗毛と附けしこて仔細ないぞ、能う聞け、予は酒井雅樂ぢや、雅樂(唄)が乘る故三味線で宜からう』錦『ハッ、成程』殿『乘る時には牽かせもする若き馬を馳こも申す、止める時にはドー(胴)こも申すぞ』錦『成程、お上がお召し遊ばす故三味線、若し御家來方が乘りまするこ』殿『ウン罰(撥)が當るぞ』

大正九年新年御題（一）内王經瀾

琵琶歌　田家早梅　東京橘旭翁譜　京城中村都一作

開二

三　纖朧明うて曉と覺り(上)

三　布被暖うして春を知る　水地

上　田家の賤が軒端にも

中　春や來ぬらむ白妙の

下　雪まだらなる庭の面に　崩し(菱)

六　かつ咲き初むる梅が枝の

五　花の匂ひに誘はれて

上　谷の戸出づる鶯の

中　鳴く初音さへなかくに

下　まだ調節なれぬホウホケキョ　鶯(山茶花)

乙　鶯語猶澁谿房未喧

獨歩早春白金具入

七　煙霞はまだき遠近の(上)

三　浮世の塵とふる雪や

上　とざす氷はほぐれそめて

中　健かなる姿けだかくも

下　凜たる操雄々しくも　友千鳥(並用)

上　百千の花に魁けて

中　匂ひあまねし君が代の

下　八千代の春に薫るらむ　切り

五　梅花ハ御國の姿なり

三　げにや御國の匂ひなりし

懸賞　新春文藝

……俳句……

『題』猿曳き

一等　京城明治町　中川蒼雰
猿曳にはぐれ子が唄ひ居る日向

二等　永登浦驛町　富田都落人
猿曳きの影濃く來るや松の門

二等　雁安　中川かね
猿曳きや雪の來るべき空の色

三等　京城南米倉町　橋本奇澄
猿曳きの隣に移る人輪かな

洪城　黒瀨竹堂
裸木の奥に官舍や猿廻し

龍岩浦　鶴田みつ子
猿曳きの醉ひ唄ひ行く夕べ哉

佳句

仁川　本莊光月
猿曳きの仰ぎ過ぐ高き冠木門

光州　津々見冬羊
老ひし猿の着飾つて舞ふ哀れなり

太平驛　樋口梧棲
餅の碟に猿曳きの綱が纏はれけり

平壌　國宗虎吉
黄昏や猿曳き歸る町端れ

雲山　宮崎露女
傍見する猿に緣打つ笞かな

釜山　門田靜波
猿曳きや雪降り積る朝の町

龍山　西村秋芳
猿曳きの猿抱き寢る旅籠かな

平壌　荒木さきた
身振おかしき猿曳人や夕嵐

龍山　上田紅岸
猿曳きの皷淋しや露の門

京城　島田才涯
猿曳きや彼我を搞らふ木賃宿

同　岸溪舟
猿曳きの猿を勞るや雨の宿

鎭南浦　大黒花鷄
梅薫る畷を往くや猿廻し

龍山　羽鳥十八公
猿曳きや猿の調度を一ト背負

晋州　鐵倉南陽
猿曳きの背で物食ふ小猿かな

哈爾賓　大石卸牛
犬追ふて猿曳き休む渡場かな

洪城　春田若闇
色褪せし大風呂敷や猿廻し

京城　坪山烏村
猿曳きが軒下を行く霰かな

洪城　豐田鐵齋
猿曳きや腰にさしたる大矢立

江陵　近藤葆嗣
猿曳きの腰に提げたる袋かな

咸陽　山本華城
見知る氣な髯の男や猿廻し

京城　吉追東一
猿廻しの來て双六の崩れけり

晋州　久木俊子
猿曳きの皺も打たで踊りけり

同　森山丁子
猿曳きの賢さや飾り餅

龍山　大木群久
猿曳きが歸へるに似る子供かな

京城　原田柾人
禮者に置かる火鉢に寄るや猿廻し

洪城　杉阪木公子
都大路の並木を往くや猿廻し

永興　後藤規矩大
猿曳のくやせおかしき厚着かな

江景　酒井西坊
押飽きし猿の圃や夕渡し

朔州　森岡淡存
芽出度う候と猿曳門を入り來る

京城　海瀬久子
猿曳きと集ふ兒の住き衣装かな

京城　山邊歩人
兒等の集る空地の日向や猿曳し

晋州　森山浦鴨
猿曳きや猿使ひ分くる米の量

龍山　鈴木チエ
猿曳きに茶を煮る里の旅籠かな

晋州　濱田貫禰
猿曳きに追はれて逃げる小犬かな

龍山　安部
雪催ひの暮れ路を急ぐや猿曳し

碧潼　鈴木湖城
手兒こる猿愛しむや猿曳し

水原　村田修道
猿曳きの皷にや聞く奥の町

京城　松垣綠子
猿曳きて女の國に唄ひけり

同　橋本築子
猿曳きや禍知が門の厳しき

成安　神部稀賀
背の猿を叱りつゝ栗を與へけり

京城　橋本丶水
夕陽に猿曳き急ぐ山路かな

成陽　山本しゝよ
田舍町の昼閑さや猿曳し

龍山　猪俣竹雪
猿曳きの追ひ來る兒等を叱りけり

同　丸山高嶺
猿曳きは藤吉郎と呼びにけり

永興　瑕川王葉
煎豆を横目に鉚たる小猿かな

洪城　田内石泉
吹雪避けて軒下に居るや猿曳し

京城　中上榮太郎
猿を背に暮色を歸へる男かな

水原　馬場松濤
にこやかに猿曳き行くや村外れ

平壌　江村
猿曳きや遊女湯に行く小梅町

京城　茂呂繁
慾なくて唯猿曳きの老にけり

同　林清市
猿曳きの草鞋轉ろげに通りけり

大田　島津柳葉
笑はれて芸を忘れし小猿かな

大邱　大賀壯一
綱を曳きつゝ拍子つける猿曳し

大田　松浦白子
物欲しと猿が猿曳を拜むかな

大邱　磯貝正夫
猿曳きに居蘇振舞へ謡ひけり

京城　武田紫蝴
雨に籠りて猿曳き書を讀みけり

成陽　山本透
靜かなる田舍の街や猿曳し

京城　永田海雲盛
猿曳きは役者顔なる男かな

仁川　五月
猿曳きの憩ふ日南や城下口

春川　瑟湖
猿曳きの猿にも分つ味柑かな

平壌　高橋三巨
猿曳きの背に眠れる小猿かな

京城　松浦政江
宿に着きて錢勘定や猿曳し

晶亭　山倉聽流
猿曳きの來て賑わしや磯の村

安東縣　弘里生
猿曳きの後追ふ數の童かな

仁川　土屋森葵
海道の朝閑かや猿廻し

金泉　岩片二日園
四辻の人輪の中や猿曳し

沙里院　渡邊蒼葆香
猿曳きの頭巾めでたき圓かな

瑞興　安田樂浦
皺の小家に鳴らす皷や猿曳し

京城　田中可觀
金冠の御猿めでたく舞ひにけり

謹賀新年
釜山府辨天町二丁目
藥種商　大黑西松商店
電話三一七番　長四〇五番

謹賀新年
釜山府辨天町二丁目
金物商　角野商店
電話二三三番

謹賀新年
龍山金物商組合(イロハ順)
漢江通十三(電話二六〇番)　尾崎金物店
元町二丁目(電話三三七番)　三並美一
漢江通八(電話九六〇番)　島田忠作
元町二丁目(電話八一六番)　柴田國市
榮町一五二(電話一五三番)　毛利辰次郎

謹賀新年
朝鮮大田本町　井上齒牙技術所　井上泰雄
朝鮮大田榮町　義齒術全般　竹腰一憲
朝鮮大田本町　藤井保齒院　藤井松弌　長電話一二二番

謹賀新年
大正九年一月元旦
忠淸南道公州旭町　公州自動車(合名組)　電話五三番
鳥致院停留所　電話二二番
論山停留所

謹賀新年
文學家　錦山玉洞蒼虎軒
前敎官　朴天表

謹賀新年
御旅館　御料理　慶南密陽東石
要　桃太郎

謹賀新年
湖南線金堤
阿部農場
石川縣農業株式會社　奥村竹三郎
耕富農場　北尾英太郎
平富榮一
橋本農場　橋本央
東拓金堤出張所　大和田眞治
多木農場　牛尾壽郎

謹賀新年
知事　亥角仲藏
參與官　金寬鉉
第一部長　矢島音次
第二部長　高武公美
第三部長　山下謙一

謹賀新年
全北井邑郡禾湖里
熊本農場
場主　熊本利平
支配人　鈴木信太郎

謹賀新年
全羅北道廳
李軫鎬　金潤晶　片岡文理　石川登盛　松村松治　松澤國男　八尋生彦　坪井豐仙　北村八勇　城戸派彬　野村清行　田所恒足　守山五百治　永谷重三　杉相　萩原織之助